

上矢敲氷伝——天明七年（八年）——

清水茂夫

天明七年（一七八七）五十六歳

一、俳諧活動の実態

天明七年における俳諧活動は、「坐右稿」が完全に残されているので、かなり詳細に知る事ができる。元旦の発句は、閑居試筆と題して、「古庵のひづみ直さん筋繩 敲氷」で、近隣知己の人々の来訪を期待しているようである。二日の春興の発句は、「鶯や今年は軒に竹植ん 氷」「我が老を慰むる物ぞ柳かな」「青柳や爰ぞ長柄の橋の添」「落積る椿すさまじ絵の具谷」「金岡が絵馬動きけり臘月」「風鈴の音は何時ぞ臘月」「藪入や美人顔して捲簾」「北嵯峨も遅き事なし梅の花」「鷹匠の心剪けり春の雨」「かはるく舞殿へ来る胡蝶哉」など十句にも達し、我が草庵の近景から、京都あたり春を想起した句まで作っている。（三日）には百童父子・元齋・寄山ら十余名が訪れた。「雉子啼や向ひ合うたるいもせ山」と元齋が吟じているのは、和歌山の歌枕であろうか、敲氷の春興吟に依じての吟であろうと思われる。（七日）子の日。「鉢植の松買うて来る子の日哉」「山畚もに京の目覚す若菜哉」「学寮の机にはやす齋かな」以上敲氷の三句。（九日）「春雨に一重脱ぎけり山の色 樵路」（以下平橋庵を訪問した門弟などが吟じたり、持参したりした句は、特別

の場合以外は、作者と句だけを次の例示の如く省略して記すことにする。(十日)「咲にけり老も若きも梅の花 桂翁」
「摘めやつめ何処迄も我若菜畑 松唄」「春もや、廿日過ぎぬる雨夜哉 柳美」(十二日)月次会はじめ。連中四十余人
入来。兼題木芽。「山畑に育てし櫛の木芽哉 氷」「降りながら明日幾夜なり春の雨 阿老」「吸物に盛りても見たし春
の雪 阿老」「名月や木陰に居るは女房連 阿老」「花も香もなくて好かる、柳哉 家風」(十三日)前夜四竹楼にて探
題ありしに、鳳巾いかにぼり。一刻の暮をしみけり鳳巾 氷。(十五日)「みたらしの末にも清き根芹哉 夏明女」「紅梅もさくや
女中のとしの礼 春沢」「白根へはまだ引足らぬ霞哉 春沢」(十七日)善光寺より夢山下迄赴く。「畑主のむかし語や
梅一木 キ明」「谷川に下はあぶなし路の臺たち 同」(十九日)雅路逗留。四竹楼にて夜咄。歌仙興行。(廿一日)「鶯に拍
子抜けたり地紙うり 徐水」地紙売は「俚言集覽」に「扇の地紙を売る人なり。むかしは江戸にて夏に入て売しといふ。
此五・六十年このかた絶てなし。」随筆。「賤のをだ巻」に地紙売とて、四月半にもなれば、奇麗なるひとへ物に八極
暑といへども単物足袋を用ゝ足袋雪踏をはき、地紙の形にこしらへたる箱を三つ計かたげ地紙地紙と呼で売歩行たり。」
とある。徐水は江戸で地紙売を見て吟じたのであろうか。(廿二日)「春雨や青々と伸る昆布の皺 麻丸」「遊びがてらに
初の市人 氷」続いて歌仙を興行する。(廿四日)囀て見たき軒場ぞ斥鷃 潤路「まだ梅咲ぬ雪の山陰 氷」潤路は自
分を「莊子」の逍遙遊編に出てくる小鳥に託して、平橋庵を俳諧興行をして見たくなる所だと言って讃えると、敲氷は
まだ梅の花の蕾も堅い雪の山陰にも等しい所ですよと、謙遜している。歌仙興行するのが当然のように思われるが、歌
仙は記されず、春興と題して「老が身は猶永き日や春の雨」の句が記されている。あるいは、続いて「うかい山定会」
兼題として「永日や拾ひ歩行て忘れ貝 氷」の句が記されているところからして、二人は共に「うかい山定会に赴いた
のであろう。(廿五日)守真亭において東谷と夜話。「針遣ふ膝に影置く柳哉 東谷」(廿六日)「植込みの中に芳し春
の草 麦路」「今日聞初むる鳥の囀 氷」原菟・梅酸・里道・元齋と歌仙興行をする。探題に、「雲雀啼く野道や兎の肩

車 水」(廿八日)「鶯や静に遊ぶ庵の竹 杜栄」「丸めしまゝにまだ残る雪 水」を発句・脇として歌仙興行。奥山氏
何がしの婚嫁を賀しけるに、園中に人の相知れる松の侍れば、「目かれせでめまつをまつ若緑 水」(晦日) 四竹楼に
て探題、「弁当へ青みにつまむ木芽哉 水」

(二月朔日)「春雨や源氏がるたも取尽くし 秋江」(二日)「佐保姫やさほの河原に立つ霞 可調」佐保姫は春を掌る
女神である。佐保山は奈良の京の東方にあたる。又方角を四季に配当すると東は春に当たるので、春の女神を佐保姫と
称した。(四日)善光寺に参詣して彼岸終わる。(七日)「初午や迷子まどの札の提はじめ 水」荆沢九知が願主となり八幡
宮に奉納する句の軸に「破魔弓の竹も出るらし八幡山 水」(八日)柯亭・山泉・鳥仙・可見・元斎・亀石・百朶・山鷄・野
子・敲水の九吟五十韻を興行する。「今日までの不沙汰恥し花の陰 柯亭」「雪は解けても水浅き谷 水」を発句脇とし
た。(十日)文通、抱山宇・古尺・再蝶らの元旦口号の句が江戸から届く。「ふるとししの越路の家づとに水飴一曲もらひ
たるが、中々かたくして、手に及ばず。春立つ迄もと捨置きたるを、今朝開きみれば、のったりと飴も解たり今朝の春
抱山宇」「遠騎の供のはぐるゝ霞かな 古尺」「淵は瀬とかはれど岸の柳哉 同」「香をりに夜の客あり梅の花 再蝶」
「八日には脂水へ流す齋哉 同」「鶯や柏手打てば枝うつり 同」(十二日)定会連中廿余人入来。「手を突て先づ見上
るや初ざくら 百草庵 柳霞」「まだ春寒き里へ稀人 水」(十三日)文通、「爰はいつの都ぞ雪の若菜摘 帛儿」「耳遠し
夢に物いへ冬籠 生徳」「飛ぶ影もまだしの雁や春の月 乙艸」(十四日)西落合(現、甲西町)山花願主にて、八王子
宮奉納に、八重霞氏子の竈賑はしき 水」(十五日)「びっくりと冴返りたる涅槃哉 水」「真直な枝もありけり梅の花
如想」(十六日)珊瑚及び浮亀庵の死の報に接する。

珊瑚尊者は七覚山(円楽寺、新義真言宗)の加藍をふたたびおこして、法のともしびをかゝげ、功なりし後は、人に
知られじとて、木原(現豊富村)てふ所の山寺に行ひすまし玉ふ。されど月の夜ごる花の明ぼのには、折にふれし口すき

びなども、もと相しれる人の許へ聞えしが、過しむ月下流げたんの日、寂し玉ふときけば、をしむに言葉なく、後の日拙き一句を捧げ侍る。「手にふれし独鈷に残る寒さ哉 氷」浮亀庵の叟世にいまそかりしほど、俳事の余間には写し絵にめでられしが、今は句中の画、画中の句に感ずる事のみ少なからず。「陽炎の眼さへぎるや筆の跡 氷」

五十六歳という老を感じる敲氷が俳友として親しかった人々の死に際して、寒々と心に沁みる悲哀であった。珊瑚の独鈷を見、浮亀庵の俳画に接しておのずから眼は潤ふのである。

(廿二日) 素鏡文助を携へ来て一宿。(廿三日) 長瓜・元ぎね来訪。(廿五日) 笛川舎全。題松。「神垣やおぼろ」と松の琴 氷」(廿七日) 故遊子は官途に十とせばかり、甲斐の白根の寒きを凌ぎて、ことし故郷に帰らるるを送る。

「家づとに狩つゝぞゆけ山桜 氷」。吟朝子の二男に扇子に書て贈る。「種もよし育ちもげには児桜 氷」

(三月朔日) 流れ行く水も色あり桃の花 文橋来訪。(三日) 雛屋から貰ひに來たり桃の花 氷」(四日) 「草餅の音里深し桃の雪 仙湖」「藜あかさの杖にもゆる陽炎 氷」。來訪した仙湖に杜栄・鬼孫・山鶏を交え、歌仙一折を興行。各探題で敲氷の吟は「山吹や赤壁に似た咲処」「海裳や色を争ふ児の顔 氷」である。仙湖はこの頃、旧号潤路を改号したと思われる。(五日) 來客玉樹・長瓜。宗文首座のみのの国に赴くのを送った。「白雲の奥に茶摘や虎溪山 氷」。この句の虎溪山は虎溪三笑の話やその漢画から生まれた造語であろう。晋の僧慧遠は中国江西省九江の南にある東林寺に隠棲し、虎溪を渡るまいと誓を立て、安居禁足につとめていたが、陶淵明と陸修静が訪れ、帰るのを談笑しつゝ送って行ったが、思わず虎溪を通り過ぎてしまい、禁足を破ったので、三人は大笑いしたという。この説話を基にして、宗文首座も故郷美濃国に赴き、慧遠の如く安居禁足の隠棲生活をおくるであろうと吟じたのであろう。

(七日) 府下に行く。(八日) 來客長瓜。東都生徳から消息が来る。「甲斐がねに行っても見たし春の富士 生徳。」「春興、鶴の舞ふ日和見付し梅見哉 同」伊勢神戸の瓜筋去年九月六日、東都にて身まかった由、生徳より申し來った。又瓜筋

の実父井上半兵衛（表徳は花情）から文通もあって、瓜筋の病中吟「市中や障子に秋の風の音」父花情が瓜筋の絵像を
見ての吟「晴行て又思ひ出すしぐれかな」春興の句「家づとに匂ふ袂や梅の花 花情」の作を送られた。（九日）曲水
や流れの末にまはる月 鯉父。（十二日）「生筒は大同竹か桃の花 水」を発句として、月並百韻興行。定連十余人入来。
逸見から仙菓が来訪する。（十三日）「追出せば一羽なりけり行々子 柳霞」「百万の花背中は風に吹かせたり 同」「名
月や渡られさふな海の上 同」「白ぎくや染る斗が秋ならず」（十四日）元ざね・室梅兄石和官舎へ転居する。奈良尾老
人、その外見送りの人々一同に入来。（十五日）上総の国吐虹ぬし、予が長寿せんことをほぎて贈らるゝに返し。「春を
経ても人にしられねさくら草 水」十五日より十八日まで飯田（現、甲府市）に逗留。十五日の夕より雨降り、十六・
十七両日降る。十八日村雨。阿老ぬしの新宅にて「透垣のひとへ隣や夏木立 水」文川ぬし年頃家にひめ置かるゝ宗祇
法師の懐紙、山崎老人の詠草など床に飴りつけて、こよひのあるじまうけまめやかなるに感慨少なからねば、「床しさ
よ見ぬ世の人を花の友 水」を立句として歌仙興行ありて、後おのゝ探題。「錦織る都には見ぬ蚕かな 水」（十九日）
臨川亭で歌仙興行。後探題「秋の露置せて見たき豆哉」（廿日）歌仙興行、杜菜・敲水・鬼孫・溪十・仙湖の五吟、後
おのゝ当座。「行春や老せで遊ぶ小田の鶴 水」「茶を売って居るは婆々也若楓 水」（廿二日）長瓜入来。（廿三日）
十二日から廿三日まで溪十逗留。（廿四日）うかひさん月次会、兼題「春もよし夏も又よし麻衣 水」（廿五日）曲輪田
（現、櫛形町榊地区）秀花持参の諏訪宮奉納句合の軸に「六月も寒し御供の水餅 水」（廿七日）夜涼から明廿八日庵
の祝会の事文通来る。（廿八日）飯田官舎の人々が、夜涼の旅寓の草庵を忘川（現在の荒川）のほとりに結び、今日入
庵の賀筵が催される。「百鳥の声いさましき花の庵 雅重」「摘て持ち寄る茶に倦まぬ友 水」を発句・脇として、七十
二候を興行する。夜涼は入庵して来日庵と号した。「夢山は窓に入るがごとく、忘川は軒に流るゝに似たり。笑ふ山す
める水あり柴の庵 水」「笑ふ山」が春の季題である。余興探題に「鶯や筆を通辞に老の耳 水」

(四月朔日)「飯櫃にも簾懸けたり更衣 水」(二日)長瓜入来。「風随老人こたび高祖大士の旧跡を慕ひて越路より佐渡がしま迄もと心ざし申さるるに、かの地に伝へ聞く奇瑞の事思ひ合わせ侍りて、題目の夏書や浮ぶ老の波 水」(三日)「ほととぎす初音も末も倦むはなし 水」(七日)文通「本尊は寝て静かなり冬籠 越後 秀外」「人々、たばこより目覚しぐさぞ齊の夜 同」「流るるは氷の音か臘月 同」「楮売さくらの盛告げにけり 東武南浦」(八日)「吉田の桃宇の天満宮奉納勧進の巻軸に、神垣に散れども尽きぬ松葉哉 水」(十日)昨日飯田の来日庵会、今日帰庵。(十二日)定連入来、月並百韻興行。(十四日)仙湖訪ふ、「山里へ夏告鳥や行々子」「三越路へけふ思ひ立つ袷かな 亀雲」「稀人に飯焚せけり麦の秋 同」「慇懃に隣歩行や更衣 鬼明」「麦秋やびっしと囲ふ菊畠 同」(十九日)十六日田中琴松下に行き、二夜泊り、昨十八日帰庵。(廿一日)沢登(現、若草町)の麦生の正の木奉納勧進に「神垣の竹こそよけれ 蚕箸 水」(廿三日)「雨降れば溝まで出づる蛙かな 貞松」「夏草や茂る中にしをり戸 水」「軒に住める蛸も道のをしへ種 伴水」「あやめも生ず浅き池水 水」逸見箕輪(現、高根町)利躬来訪。伯父なる人の七周忌追善集の事を語る。即席の吟に「橋へ来てこころ落着く涼み哉 利躬」上の橋は平橋庵を意味している。「しだるゝ影もうすき葉柳水」敵水の吟も依頼に対して謙遜している。(廿四日)うかひ山月並兼題に「卯花や夜眺むればもの静か 水」(廿六日)増水のため笛吹川渡しなく仙湖泊まる。折から敵水の門弟として俳諧に熱心であった女流俳人杜栄が没した。程なく敵水家の農業に従いつつ、俳諧にも力を注いでいた後継者の山鶏も病床につき五月三日に不帰の客となった。坐右稿の四月二十六日には「杜栄没故す。山雞病氣よからぬまゝに五月下旬まで事を記さず」と約一箇月の空白があり、その間に杜栄と山雞とを追悼する吟が記されている。

悼

杜栄女がはいかにこころざしせちなる、あまり筆すさびの拙きも口をしとて、ことし初春法帳書いて得させよと聞

ゆ。やつがれ筆を執ることは鳥の跡のふつつかなれど、他のもとめならねば、身の後のかたみにもと思ひこめて草庵の記をかいはりしが、おくれ先だつならひ、わりなくもさかしまになり侍りし事、ほるなく香を捨て吟ず。「命毛の切れ果つるまで夏書哉 氷」

哀傷吟

うの花くたしの物うき折から杜栄女が身まかりぬるにおどろかれて、胸とどろく中に山雞が病ふ。くすり降る節の頼みもなく三日といふ朝、無情の嵐にさそはれしは、更に夢ともうつつとも思ひわかさね。孔子のひじり子夏のかしこきだにも、子におくるならひのがれがたく、誰も終にはとどまるべき身ならぬことははしりながら、おくる、ほどの悲しみに、きのふの空をながめやれば、雲もきのふの雲ならぬ世の中こそ定めなけれ。「五月雨や我が身ひとつに日の永き 氷」

四月二十六日には、熱心に指導を重ねて来た杜栄を失ひ、五月三日には、今までも頼りとして来、今は俳諧の後継者とも考えていた山雞を五十六歳という老齡で失ったことは無常の厳しさ悲しさを、いかに切実に味わったことであろう。しかし敵氷はその悲哀に襲われている今を俳諧の宗匠としてひたすら生き抜かねばならない宿命を一筋に凝視して、五月二十九日守黒忌を迎えた。「坐右稿」はこの日からまた書き続けられている。(五月廿九日) 守黒忌。葛粉のうるはしきより麦粉のわびしきこそよき手向なるべけれ。「うすの歌は古風を守る麦粉哉 氷」「末葉栄ゆる夕顔の夢 鬼孫」「ただ人と見えぬ乗物立させて 成川」以下五十韻を興行する。

(六月朔日) 昨日守黒忌法筵の後座、おの／＼題氷室。「横柄に衛士をあしらふ氷室守 仙湖」「我が家へは只手ぶり也ひむろ守 童歳」「献上を見ても齒にしむ氷哉 百朶」「帷子を見て驚くや氷室守 元齋」「戻りには布子重たし氷室守 古園」「此暑さしらすで住けり氷室守 春竹」「森々と鳥も通はずひむろ山 慈鳥」「年寄の齒に衣着せず氷餅 鬼孫」「瓜

茄子入れて置きたき氷室哉 氷「此のほど親しき人々のもとめに応ぜし句、「布袋の馬に乗りし画に、餅の腹減らすにはよし飛馬始 氷」「題扇 被着ぬ額にかざす扇哉 氷」楼台に酒宴の画、「月宮に入る夢見たり夕涼み」(六日) 橋牛溪十三回忌に、「我が友橋牛溪ぬし苔の下に年を経ること十あまり三年になん成りぬ。謚して榮養昌雲居士と称す。いづれの年の夏にや有けん。一夜やつがれと共にかつしかの水辺に逍遙して、かゝる口ずさび侍りしが、今は無明を照す法のともし火成べし。「ふるときて人狂はするほたる哉 牛溪居士」「古茶のかほりのなつかしき銘 氷」歌仙興行して手向侍る。(九日) 凌冬居に一宿する。(十二日) 定連の人々入来。今日天氣清明、夜に入りていよいよ月明か也。(十三日) 平橋庵にやどりて、けふの暴雨を凌ぎ侍る。「雨のうさ忘れて涼む月夜哉 三樹」麦粉もてなす庵の池水 氷(十四日) 都留の郡なる園林坊運水ぬしは、うばそくの勤めのいとま風雅に心をそみ、かくごの浅からぬぞいと頼母し。かねて吉野のおくの雲を凌ぎ、かつらぎの道の橋をわたりて、其の折ふし心にかびし発句、猶はた四時の花鳥にめでて口ずさび置れし一巻を瓜じるししてよとおくらる。いなむは心隔った似たれば、ただ花のしづゑの長きみじかきたくらべて、ことほり侍るものならし。「老の目はとどかぬ花の山路哉 氷」右の懐紙春の末に預り置きしをこたび墨引して返す。「葬の虫はいろくあれど虫哉 春沢」「五月雨もふりみふらずみ時鳥 同」(十五日) 行脚桑門美丸来訪。時鳥聞や白根の裏表 美丸」「あやめの薫り深き旅笠 氷」今日桂林舎仲亮ぬし、五とし六としを経て来訪、終日閑談。(廿二日) 武江かつしかより音信。「名月や笛にも露の夜もすがら 抱山宇」「句を吐けといふ催促か子規 同」「麦畑もある別荘の庭 蘭溪」「目覚せと牡丹へ召すや夜居の僧 抱山宇」「漏桶の音聞て来る蛙かな 乱竿 逃るにも弱みは見せず稚子の声 同」(廿四日) うかひ山会 題鵜舟「夜嵐につぶやいているうぶね哉 氷」此ほど飯田官舎の友人、近く武江に赴き、はた信州に赴かるゝを送る。「朝道ぬし信濃国伊奈の郡齋に赴かるゝを送る。風越やかほる便の文待ん 氷」「阿老ぬしこたびしなの国其原山近き郡齋に赴るゝを送るに、元より莫逆の友の心隔つべきならねば、いささか寸心

を述て便面(扇の類)にかいやり侍る。「涼しさの心を磨けとくさ山 水」「停雲閣のあるじは吏事を間にして風雅にいそがはしければ、人の和すること、淵に遊ぶ魚に似たり。やつがれが城西の吟行に一夜々々の旅寝にも心静に肘を曲げてよと、ことし春の末ばかり庵結びたまはりしが、いくばく日数なくて、こたび公の命によりて、かしの官舎を去り、武江に赴かるゝを送る。翌日の首途はん春の一夜酒 水」「古川氏魯水子は吏事の功おほやけにしろしめしければ、家のめいばく、人みな仰ぎ侍る。こたび飯田の郡斎を去て東都に赴るゝに、くつはづらをとどめて再会を契る人々少なからず。ただ鶴瀬関の名にめでて鶴の齢を保ち玉へかしことぶきてかいやり侍る。馬柄杓に汲めや清水も不老不死 水」「空行月のめぐり逢ふといへる古歌をずんじて一夜名残を惜み侍る。程隔つとも隣りなり月の秋 水」城西の河辺に柳を手折て鳥睨子の旅よそひを見てはやし侍る。馬に飼へよ旅の暑さを忘川 水」服部子訥のぬしさいつごろ家の詩集を恵みたまはるに、其のしらべ高うして和することのかたき趣也けり。こたび鳥睨ぬしの東行のつてにいささかむくひのことはよせ侍る。しら雪の曲を聞つゝ夕すゞみ 水」

(七月朔日)「初秋や老の齒にしむ茄子漬 水」(二日)山鶏追善五十韻興行。知己の連中入来。発句兼題、魂祭。当座秋草。「曼珠沙花といへるを探て、いかめしき名をば持ちけり曼珠沙花 水」(七夕)「不産女の願ひわりなし星こよひ水」。(八日)幸田氏の老母信州よりのかへさ訪はる。中野官舎桂岡のせうそく来る。(十日)昨夕古尺武江より着。携へ来る文通に「初秋やいよく黒き朝がらす 武江 霜後」「立琴や裏に音を啼く虫一つ 同」「挟まれて坐頭もめぐるおどり哉 同」「薺や花咲きしばむ雨の朝 同」「干あがりし川を尋ぬる蜻蛉哉 同」「木缺を手に忘れけり時鳥 米珠」「蝙蝠や明るは稀な神輿蔵 同」「半立つ年や茅輪のかざり縄 南浦」「秋立や寝顔へさはるかやの裾 同」「念仏も聞えて眠し春の風 但馬 袴仙」「山中は細き雨の若葉かな 同」(十四日)「娑婆はただ木賃宿なり魂祭 水」(十五日)笈形の火を見むとて向岡舎に遊ぶ。「笈形の火ともしやほらの貝 水」(十七日)「はじめて平橋庵詞宗にまみゆ。「草の名を何か

ら問はん千種の秋

行先庵

沖考「燈籠しまうてくらき柴の戸

水」(廿日)

山梨岡中村氏一楽ぬしの名を改めける賀筵

に百韻興行、兼題岡・月。秋の田の出穂を月夜に岡見哉 水」岡見とは十二月晦日の夜、蓑をさかさに着て岡に上り、梢の間から我が家の方を見て来年の禍福・吉凶などを卜知するという習慣をいう。敵水は岡見を稲の良否を見て知ることと転用したのであろう。(廿四日) 青鳥文通。「終夜夢も結ばじ二星 青鳥」二星は特に牽牛星と織女星を言う。(廿五日) 杜栄の追善に向富山で世吉興行。兼題稲妻。「稲妻や行て帰らぬ水の上 水」今日仲亮ぬし来訪し、瑚璉上人追善について談じ一宿する。(廿九日) 信州飯田産の行脚魯山来訪。「尋ね来る力やなくて秋の蠅 魯山」「花野のかほり留し笠紐 水」魯山が夜の鴉の画に賛することを需めたが、不快だったので辞退する。後ふと禅家で示された闇の夜のからすという道歌を思い出て即事に「秋の夜や鳴かぬ鴉の工夫せん 水」と吟じた。

(八月朔日)「八朔や世の中よしと雁の文 水」文通「通りぬけくても花野哉 利躬」「横雲は橋とこそなれ天の川

同」「八さくや穂なみへわたる村雀 仙湖」(六日) 天神中条(現、増穂町)長沢氏から八幡宮奉納の巻軸に一句を望ま

れて「角力取も歩みはこぶやおとこ山 水」昨夕成川・古園・鬼孫来訪し、歌仙一折興行。(八日) 一斗坊は老師門瑟の夜寒の凌ぎもうしろめたいと、十五夜の月を共に見ることもせず、世に思ふ事満てらんより少し足らざらんにはなど言つて、別れを告げた。「満たぬ月眺めて明日は別哉 水」「心を残す庵の虫の音 古尺」、など六吟歌仙を興行した。

各題砧に「みよしのに耳驚かす砧哉 水」(九日) 筑沙、髭籠に山葡萄を入れて平橋庵を訪う。「初生の青さもおかし山葡萄 筑沙」返し「手にすゑて玉とこそ見れ山ぶどう 水」(十二日) 定会連衆廿人入来。(十三日) 伊勢岩戸山の下松山穂麻呂・葛原中の兩人諸国式社(延善式神名帳に記載されている神社)参詣の志願にて来訪。敵水は需めに応じて短冊を贈る。(十四日) 古尺七月九日より逗留、今日午時雁坂越えて武江に帰る。(十五日)「名月や明ければ落とす田井の水 水」(十六日) 河堤使河野可什氏来訪。「慕ひ来て扱こそ涼し芦の花 可什」「鷺の峙のしれぬ十六夜 水」「旅寓

を訪ひて物語る序に即興「さなきだにいさよふ月の高根哉 水」(廿二日) 先夜(十六夜) 送りし一句に脇して来る。

「千金にかえぬ折に初雁 可什」(廿三日) 其扇主武江に赴く折から来訪。(廿四日) 市川郡齋なる素川子が服氏子訥の詩集をたづさえて来訪。本名長谷川幸蔵、名鎮辰、字は子倍。今日五考居士追善会、旧宅において興行。題各、尾花。

「一度は嵐遁れぬむら尾花 水」(廿八日) 和州郡山窪田文左衛門家父の訃音。「今は四歳の先なりし。やつがれ熊野の浦伝ひして大和路にさまよひ、窪田氏の許に俺留す。家大人はむかし今の事ども何くれとくっしいで、物語聞えしが、ことし文月半ばばかりなき人にかずまへられしとなん告ぐ。をしむにことばなく、ただまみえしぶじの俤のみ眼に遮り侍る。「うつりかはる空の便や雁の文 水」

(九月二日) 元齋・古岡・鬼孫らと菊の句をおのく工寮。「大名の手にもふれたり菊の鋏 元齋」「歌よまず詩をも作らず菊作り 古岡」「下戸ならば玉に疵也菊の主 鬼孫」「きく圃や秋とは見えぬ青簾 水」「都には住まぬまされりきくの庵 水」(三日) 長瓜・忠蔵なら田温泉より帰る。秋田氏湖雲大阪へ上り道中来訪。(七日) 嚴管上人東武より帰る。四日市場(現、石和町) 小剣社に四季花鳥奉納発句の軸の勸進を乞われる。「宝剣を飾るさつき宮居哉 水」筑路ぬしの嫡子は齡二七にも足らで筆の道にはことにざへありしか。文月廿日余り四日といふに苔の下露と共にほかなき噂来りけるを悼む。「雁の文を見るに付けても袖の露 水」(九日) けふ来ずば交はりた、ん菊の主 水」「独りずつ見て戻りけり庵の菊 水」(十日) 渡辺素可来訪、兼ねて約し侍りし文選携へて来。(十一日) 成川・鬼孫来訪閑談。(十二日) 定会興行。「酒買った家見下すや紅葉狩 竹翁。今夜渡辺氏四竹楼に泊るを訪うて談話す。又来雪亭に行て夜話す。(十三日) 銀屏は似合しうなし後の月 水」(十五日) 其竹八王子に帰りし節来訪。(十六日) 仲亮来訪。瑚璉尊者追善集について議談する。今夜元ざね亭で夜話。(十七日) 素川ぬし或日東洋うしの詩集を懐にし蓬畢を訪れしが、官途に事しげしとてゆくりかならず、後の日申し贈る。「たゝかれし草の戸に草の花もなし 水」右素川は市川官舎詰合長谷川氏な

る人、東洋うしより「峽官詩稿」てふものを恵みたまはる。ひらきみるに刀を売りとさくら木にのせけると其の廉なる趣は序のことに尽きぬ。あがたの民も刀を売て牛を買しもの有なん。よてせうそのはしにかいつけて頭を叩き謝し侍る。「苦は楽のたねとをしへて田刈哉 氷」東洋は服部武平、去年まで市川の郡齋に吏の長たり。(十八日) 向村(現甲府市) 小池氏の許に遊ぶ。(十九日) 荆沢(現、甲西町) の仙笛勧進にて身延祖師堂に奉納。「信ある衆生には眼の病うれへしめじと誓ひ玉ひけるいと尊し。題目を書て納めんことし米 氷」(廿四日) 山梨一丘閣へ招かれて菊を見る。

「敷島の道草やこの菊畠 氷」歌仙興行。(廿五日) 此ほど谷村梁父よりせうそこのはしに、旧識の人のあまた故人に成しをうれへて、「指折の末と成りけり菊の花 梁父」過し十六日の夜丙丁童子のわざはひに笛川舎の柴門も一時の灰塵と成ぬ。よて秋風凌ぐばかりごとに仮の宿もうけたりと聞えけるまゝに一夜訪ひ侍りて、よき隣夜寒もしらぬわた車氷」(廿六日) 一たびは勤めて見たし氷室守 田之倉 園林坊運水「朝顔や鉢の子持て花の客」(廿七日) 嶺南窓の菊見

に招かれて終日遊ぶ。「養ひの日課積りて菊の花 氷」(廿八日) 山牛ぬしが、すくよかにて駿河路よりゆきかひに草の戸叩かれければ、「我庵は冬待ちかねて冬籠 氷」「飛ぶ雁に古里思ふ月見哉 山牛」(廿九日、落合古屋氏国民ぬしの許に招かれて、世吉興行。おのく当座に暮秋、時雨。「行秋や人珍しき木曾の宿 氷」「藪柑子藪に置かれぬしぐれ哉 氷」文通「卯花に時ならぬ雪の寒さ哉 可三」

(十月朔日) 「花入の瓢をさらすしぐれ哉 氷」蔵六ぬしよりの勧進に金比羅宮奉納、「唐人もあふぐや雪の象頭山氷」象頭山は中印度の伽耶城の西方にある山。形が象の頭に似ているといい、ここで釈尊が説法したという。我が国の香川県仲多度郡にも象頭山があり、その中腹に金刀比羅宮がある。(二日) 荆沢の白砂子、ばせを忌の発句携えて来訪。(四日) 仲亮ぬし泊り、五日加茂(現、春日居町) へ吟行。(五日) 成川氏来訪、仲亮と同伴で加茂へ赴く。(九日) 三橋短尺佩来り、七面宮奉納軸に時鳥の句勧進。「御影講や衆生ぬくもる納豆汁 氷」(十日) 庄木稻荷社奉納のため西条(現

昭和町)連中勸進。「百八の燈籠や秋の紅葉狩 水」文通、蝶夢法師が南浦に伝書して申し来る。「嵯峨あらし山の桜に、大井川にて、丹波から来る水ならし花のちり 蝶夢」、「御室の花、花千本みな幕ならぬ陰もなし 同」(十一日)うかひ山千部(経)に詣づ。(十二日)芭蕉忌。吉野更科の月花に愛で乾坤無住と戯れ玉ひし祖翁のむかしの佛けふ猶在すが如し。「月雪のあるじ祭らん帰花 氷」恒例のごとく五十韻興行。連衆廿一人。(十三日)前夜青羊泊り夜話。晝あたたかなるまゝに即事に興じて青羊ぬしへ贈る。「晝も知らで眠たき小春かな 氷」(十四日)岩泉山の十夜に詣づ。文通。「傘も枯れた音なり初しぐれ 梁父」「麦蒔や野に折箸の暇乞 同」(十六日)霜飛泊り夜話。(十七日)紅白園会、おのゝ鴛鴦、「をしどりや波越ゆるともむつまじき 氷」(十八日)仙湖前夜泊り、今日終日閑談。長瓜泊り今日青柳へ赴く。(廿日)古岡来訪終日読書。(廿一日)霜鏡・山風入来、長瓜今日八代へ帰る。(廿三日)鳥橋より音信。寄山。京都智違上坐より文通来る。(廿四日鎮目(現、春日居町)より石和迄出水。夜涼来訪。(廿五日)「初雪や寝さして置かぬ泊り客 氷」元ざねぬしは眞物の事によりて清水の湊に赴かる。故郷によぎりて年たけます北堂にま見えんと聞ゆる孝子の志いとめでたし。よてほぎてかくはかいやり侍る。「たらちねに見せんとや若き旅頭巾 氷」(廿六日)山梨出行。

(十一月朔日)法泉上人・百朶上人来訪。(三日)「初雪やまだ綿売も引かぬうち 五原」このほど風邪におかされて記さず。(十日)文通。五月雨や蛙の声のかるる迄 秋瓜「蟬なくや別々の雨舎 同」「塩を焼て煙競はん雲の峯 同」「橋を行く人足早し後の月 乱竿」「行秋や野中の松を過り道 同」「炭一駄もてば分限や冬籠 同」「初霜や冬菜に味を付る紅 同」「焼米や入歯に響く臼の音 運水」風邪にてくはしく不記。(十二日)定連十三人入来。来申歳旦春興句衆議「不二を見る窓はふさがず冬籠 仙湖」(十六日)閑水来訪。七面宮奉納句合題所望。(十七日)来客、亀石・風条・花青・谷水・九知。(十九日)来客、成川・要石・石岡・元斎。成川同伴にて小石和(現、石和町)如翠を訪ふ。(廿日)

山風来訪、梅二息。(廿一日) 魚遊・鬼石・菅田神宮・成川来訪。(廿二日)「音もせず寝よきは雪の降る夜哉 如翠」
(廿三日) 寒からぬ物ならいかに雪の朝 五原」廿三日より廿七日迄齒の痛みに感じて平臥す。(廿八日) 昨夜青羊投
宿、今朝帰る。今夜臨川亭に招かれて夜話。(廿九日) 龜言来訪、夜、杜水来訪。

(十二月六日) 今夜四竹楼に夜話。(七日) 鬼孫八代より帰る。(八日) 府下に行、六龜亭に投宿。渡辺氏六龜氏の許に遊
びて、竹馬の昔何くれとくっし出て物語るに尽きず、夜たけなはに及びぬれば、今は臥してよとて夜の物もうすからず
もてなさる。今日はしはすも八日也ければ、「暖に着て寝る夜半や針供養 氷」今夜五丸・龜六の両士訪れて夜話。こ
と書あり。「寒くともすり寄て人に逢夜哉 五丸」「千鳥の声に聞あかぬ宿 氷」五年六歳うとく過しこと書あり。「冬な
がら香はそのまゝぞ梅の花 龜六」「古びの付し紙衣の皺 氷」(九日) 未刻過廟より帰る。扇風・十露ら来訪。(十日)
山梨岡一丘閣へまねかれて別歳の会。「浜焼の鯉にや乗らん年忘れ 氷」五十韻六卷興行。(十一日) 芦淵・木彭・寿宇・
少翁、神内川(現、山梨市)連四人来訪。少翁俗にて今古墳の詩七言絶句書残し置。(十二日) 定会連中入来。京都行
脚順軒文著来訪。和歌一首残し置。(十三日) 彫工南圃入来。季花入来夜話(十四日) 最勝寺観音奉納跋「堂守のただ
頼めとて梢火哉 氷」右よし田(現、櫛形町)和好勸進。来客、彫工閑能 求風 尚章。(十五日) 来客家風、陽葩・
為足・尋古・求風。去る十日に来れる文通。「東都愛宕、頓てふる雪の日見たし愛宕山 春沢」「沢庵禪師の塔所に拝参
して、爰に来ていよく秋を覚えけり 同」(十六日) 来客李言、陽葩・為足・泊り。「おもしろう一夜寝覚ぬ川千鳥
陽葩」「最う一夜重ねて見たし庵の雪 為足」(十七日) 草庵に乏しからぬ物は、雪と寒草と、竹庵に乏しきものはよね
と炭団。「炭入れのしばしばむなし鉢瓢 氷」右陽葩為足両士に一夜まくらをかしてつとめてかいやり侍る。「成田不動
尊奉納軸 柳より直なるものや御手の縄 氷」(十九日) 流水再び帰らず、ことしもやゝ空の名残近し。五遊法師十万
億土に赴かれて十歳余り三歳おとづれなきこそ有為の世のならひ也。かれはた無為を觀ずるときは香も花も実かりの色

香ならんか。

逮夜から誦経に声を遣ひけり

雪の白きは梅のおもかげ

山荘は足して事足るすまるにて

米入れ瓢幾年を経る

旅立に手紙残して置土産

真肌なまぎに懸たる朝和波

松を出て松にかくるる月の影

音なご漸寒く鷺の羽ばたたき

右表八句 独吟

今日府下へ行夕陽に帰る。風吹。(廿一日)前夜より寒気募。左の二句言伝て。

「花見しも移ればかはる枯野哉 徐水」

「橋供養済で往来や寒念仏 同」

(廿二日) 昨今両夜、求風亭にて少翁ぬしと夜話。(廿三日) 古城(現一宮町)竹原田(現一宮町)亭主と同道し古城

に二夜逗留。此ほど事を記さず。廿八日より古城逗留。(廿九日) 立春「年の中に出して見にけり紙蚕 水」(晦日) 午

時より雪降。「翌は花と見るべかりけり除夜の雪 水」

二、俳諧指導についての考察

天明七年にも同六年と同様に、敵水は甲斐の国から離れて行脚することはなかった。平橋庵を留守にすることは、しばしばであったが、多くは国内の門弟を訪れての俳諧指導のためであった。五月、山鶏没後の時期を除いては殆ど天明六年と同様に指導に没頭していた。敵水の宗匠としての俳諧指導は、平橋庵に於ての指導と平橋庵以外での指導と大別することができる。また、平橋庵での指導は、毎月催される定会（月次会）と臨時に来った門弟や知人などを指導した場合とに分けることができる。

(一) 平橋庵での俳諧指導

(1) 月次会。「坐右橋」には時に定会とも記し、例年のように毎月十二日とされている。しかし「坐右橋」の記述は極めて簡単で、「一月十二日、月次会はじめ、連中四十余、兼題木の芽、とあつて後ろに敵水の兼題の発句が記されているに過ぎない。二月 定会 二十余人、三月 月並百韻興行、連中十余人。四月月並百韻興行。五月には記録がない。それは敵水の嫡男山鶏が物故したが故に月並会を開くことができなかつたからであろう。六月十二日には「定連の人々入来」とあるので、月次会は催されたと見ることができよう。七月十二日には月並会の記述は全くない。六年にも見られるように書きもらしたものであろう。八月には、定会連衆廿人、九月にも、定会興行とあるだけである。十月十二日は、例年のように芭蕉忌法筵として五十韻を興行し、十一月十二日も月次会は定連十三人で、来年の歳旦及び春興句の衆議をしている。十二月十二日は、定会連中入来とある。以上を総括すると、五月を除いて月並会は催されたと見てよいであろう。そして十月の芭蕉忌法筵と十一月の来年のための歳旦及び春興の句を参加者で討議する以外一月・二月・三月・四月・六月・七月・八月・九月・十二月の月並会は三月・四月の座右

稿に見られるように百韻興行が行われたと見てよいであろう。既に前年にも月並百韻興行は当然のこととして坐右稿に記されなくなっているので、天明七年の月次会も簡略にして月並百韻興行が略されていると考えられる。

(2) 月次会以外の俳諧指導

- ア 一月廿二日 麻丸と歌仙興行。
- イ 一月廿六日 歌仙興行。麦路らと六吟。探題。
- ウ 一月廿八日 歌仙興行。杜栄と両吟。
- エ 二月八日 柯亭らと九吟歌仙興行。
- オ 三月朔日 仙湖らと五吟歌仙一折興行。探題。
- カ 三月廿日 歌仙興行。杜栄らと五吟。当座。
- キ 五月廿九日 守黒忌 五十韻興行。後座に題氷室。
- ク 六月六日 樗牛溪十三回忌歌仙興行。
- ケ 七月二日 山鷄追善五十韻興行。兼題魂祭、当座秋草。
- コ 八月五日 歌仙一折興行。成川らと四吟。
- サ 八月八日 一斗坊の師門瑟の許に帰るを送る六吟歌仙興行。
- シ 十二月十九日 五遊法師十三回忌に表八句独吟

右の表には、シ表八句独吟のような、指導とは言い切れない場合もあるが、ここでは門弟らの求めに応じての俳諧興行として整理した。その回数には十二回に及んでいる。この外に門弟が敲氷を訪問し、発句の添削や批評を求めようとする場合は、牧挙に暇もない程であったと言っているようである。

□ 平橋庵から出向いての指導

- ア 一月十二日夜 四竹楼で探題鳳巾。
イ 一月十九日 四竹楼で歌仙興行、雅路らと。
ウ 一月廿四日 うかひ山会 兼題永日。
エ 一月晦日 四竹楼で探題。
オ 二月二十五日 笛川舎会 題松。
カ 三月十八日 文川亭で歌仙興行。
キ 三月十九日 臨川亭で歌仙興行 探題。
ク 三月廿四日 うかい山月次会 兼題。
ケ 三月廿八日 夜涼の来日庵で七十二候興行、探題。
コ 四月九日 来日庵会。
サ 四月廿四日 うかひ山月並会 後兼題。
シ 六月廿四日 うかひ山会 題鶉舟。
ス 七月廿日 山梨岡の一楽改号につき、百韻興行 兼題岡・月。
セ 七月廿四日 杜栄追善のため向富山で世吉興行、兼題稻妻。
ソ 八月廿四日 五考居士追善会興行、題各尾花。
タ 九月廿四日 山梨一丘閣で歌仙興行。
チ 十月十七日 紅白園会 各、鴛鴦。

ツ 十二月十日 一兵衛で別歳の会、五十韻六卷興行。

平橋庵から敵氷が出向いての俳諧興行の記述されているものは、上の十八回位になる。

以上平橋庵における指導と平橋庵から出向いての指導は、坐右稿に記述されたものだけを掲げたが、総計で四十一回と言ふことになる。

更に坐右稿の記述に俳諧興行とか、当座とか記されていないが、俳諧指導と目することのできる記述があることも俳諧指導の一部として考えるべきであろう。「二月十七日、「善光寺より夢山下迄赴く」「三月七日、府下に行く」「三月十五日から十八日まで飯田逗留」「三月廿八日、飯田官舎の人々夜涼の旅寓の草庵を忘川のほとりに結び、今日入庵賀筵催される。」「四月九日、飯田の来日庵会、十日帰庵」「四月十六日、田中琴松下に行き二夜泊る」「十二月八日、府下に行き六龜亭に投宿」「十二月廿二日、昨今両夜求風亭にて少翁ぬしと夜話」「十二月廿二日、昨今二夜古城（現一宮町）に夜逗留」「同廿八日・廿九日古城逗留」などは俳諧指導を目的としていたと思われる。特に府下・飯田（現甲府市）・石和・田中にはそれぞれ甲府御役所・上飯田御役所・石和御役所・田安御陣屋などあり、それらの官舎に住居する人々の中には俳諧において敵氷と親交を持つ人々が多かった。それら官舎の人々は転任の後も敵氷に書信を寄せ、敵氷の編集した俳書には官舎の俳人の句も相当に掲載されているのである。例えば天明七年三月十五日から十八日まで、敵氷は飯田に逗留したが、十八日には官舎の住人阿老の新宅を賀して「透垣のひとへ隣や夏木立」と吟じ、同日文川ぬし秘室とする宗祇法師の懐紙や山崎宗鑑の詠草の床に飾りつけてあるの見て感慨少なからず「床しさよ見ぬ世の人を花の友」と吟じ、この句を立句として歌仙興行をしている。六月廿四日の「坐右稿」には「此ほど飯田官舎の友人、近くに武江に赴き、はた信州に赴かるゝを送る。「朝道ぬし信濃国伊奈の郡斎に赴かるゝを送る。風越やかほる便の文待たん 水」阿老ぬしこたびしなの国其原山近き郡斎に赴かるゝを送るに元より莫逆の友の心隔つならねば、いささか寸心を述べ

て便面にかいやり侍る。涼しさの心を磨けとくさ山 氷」「停雲閣のあるじは吏事を間にして風雅にいそがはしければ、人の和すること淵に遊ぶに似たり。やつがれが城西の吟行に一夜々々の旅寝にも心静かに肘を曲げてよと、ことし春の末ばかり庵結びたまはりし。「翌日の首途祝はん春の一夜酒 氷」(以下略)というように深い別離の心情を吐露している。多数の官舎の人々が移動しなければならなかったのは、天明七年六月に、上飯田御役所が取払いとなり、甲府御役所に併合されたためであった。敲氷は官舎の俳諧愛好者に俳諧を教えつゝまた支援を得たり、貴重な資料に接したりすることを得て、自己を教育することができた点も忘れてはならない。

こゝで敲氷の俳諧指導に立ちもどるが、坐右稿に見える、既述の「夢山下迄赴く」「府下に行く」「飯田逗留」「入庵賀筵催される」「飯田の来日庵会」「田中琴松下に行き二夜泊る」「府下に行き六亀亭に投宿」「昨今両夜求風亭にて少翁ぬしと夜話」「二夜古城に逗留」などであるのは、俳諧指導の目的を持っていたと見ると、その平橋庵より他出した日数は二十二日となる。従って平橋庵においての指導日数、二十三日、平橋庵から出向いての指導日数十八日、計四十一日に、坐右稿によって他出して俳諧指導に当たったと推定することのできる日数二十二日を加えると六十一日となる。また「坐右稿」には杜栄物故の翌日四月廿七日から、五月二十八日までの記述がないから一箇月の日数を除くと三三五日となる。つまり三三五日の中の六十一日を指導に当てていたのである。

なお、「坐右稿」を見渡すと敲氷の宗匠として地位が高まったことと、俳壇全体に神仏に対する奉納句が流行して来たことがわかる。敲氷の簡単な記述を年月順に次に掲げておく。

二月七日、荆沢(現、甲西町)の九知願主、八幡宮奉納句の軸の発句を勧進「破魔弓の竹も出るらし八幡山 敲氷」

二月十四日、西落合(現、甲西町)山花願主、八王子宫奉納勧進「八重霞氏子の竈賑はしき 平橋庵 敲氷」

三月廿五日、曲輪田(現、榊形町)諏訪宮奉納句の軸に秀花勧進「六月も寒し御供の氷餅 平橋庵 敲氷」

四月八日、吉田（現、櫛形町）の桃宇の天満宮奉納勧進の巻軸に「神垣に散れども尽きぬ松葉哉 平橋庵 敲氷」

四月廿一日、沢登（現、櫛形町）の麦生の正木奉納勧進に「神垣の竹こそよけれ蚕箸 平橋庵 敲氷」

八月六日、天神中条（現、増穂町）の長沢氏より八幡宮奉納の巻軸に一句を乞はれて「角力取も歩みはこぶやおとこ山 平橋庵 敲氷」

九月七日、四日市場（現、石和町）小剣社に四季花鳥奉納発句の軸勧進に「宝剑を飾るさつきの宮居哉 平橋庵 敲氷」

九月十九日、荊沢（現、甲西町）の仙笛勧進にて身延祖師堂に奉納「信ある衆生には眼の病うれへしめじと誓ひ玉ひけるいと尊し。題目を書て納めんことし米 平橋庵 敲氷」

十月朔日、蔵六ぬしの勧進で金比羅宮奉納、「唐人もあふぐや雪の象頭山 平橋庵 敲氷」

十月九日、三橋短尺持参し七面宮奉納軸に時鳥の句を勧進。「御影講や衆生ぬくもる納豆汁 平橋庵 敲氷」

十月十日、庄木稻荷社奉納、西条（現、昭和町）連中勧進。「百八の燈籠や秋の紅葉狩 平橋庵 敲氷」

十一月十六日、閑氷七面宮奉納句合題所望。

十二月十四日、最勝寺観音奉納跋よしだ和尚勧進。「堂守のたゞ頼めとて滑火哉 平橋庵 敲氷」

十二月十七日、成田不動尊奉納軸に「柳より直なるものや御手の縄 平橋庵 敲氷」

句々平明であるが、具体的に格調があり、神仏に奉納する句として敲氷ならではの感慨を抱かせる。

三、杜栄・山鶏の死と敲氷

「坐右稿」天明七年（一七八七）四月廿六日の条に「今日杜栄没故す。山鶏病氣よからぬまゝに五月下旬まで事を記さず。」とある。敲氷の生涯最大の痛恨事であった。この一箇月余の日々を脱出することは、どんなに苦悩に満ちたか

とであつたことかと思われる。

杜栄女がはいかにころざしのせちなるあまり、筆すさびの拙きも口惜しとて、ことし初春、法帖書きて得させよと聞ゆ。やつがれ筆をとることは、鳥の跡のふつつかなれど、他のもとめならねば、身の後のかたみにもと思ひこめて、「草庵(平叡庵)の記」をかいやりしが、おくれ先だつならひ、わりなくもさかしまになり侍りし事、ほろなく香を捨て吟ず。「命毛の切れ果つるまで夏書哉 水」

追悼句の命毛とは、筆の穂の最も長い毛という意であり、それに命が懸けられている。夏書は夏安居(僧が一定期間外出しないで夏中一室に籠つて修行すること)で、特に經文を書写することである。この句では、皷氷に請ひ得た法帖を、俳諧修行の一端として命の尽きるまで書写していたことを讃えると共に、俳諧修行にも生命の終るまで身も心も傾注していたことをも讃えているのである。更に言へば、このような真摯な夏書によって疑いなく極樂往生するであろうとまで言おうとしたのかも知れない。

杜栄は四竹楼の女主人であつた。もともと四竹楼は俳人古洗の別号であつた。古洗は現存している「四季の草」明がらす」などによると宝曆十二年(一七六二)頃から俳諧に志したようである。皷氷と同じく門瑟門であつた。門瑟三回忌追善集である「霜別集」(寛政四年刊)には、「甲斐の古洗、蹴鞠に遊びて故郷に帰るを」と前書して「葛の葉の霜蹴て行け山路哉」という門瑟の送別吟が見える。この句は恐らく宝曆十二年の吟であろう。明和三年(一七六六)の門瑟編の「丙戌歳旦」所収の三十六歌仙にもその名を連ねている。皷氷が平蕪庵鳥我と号していた明和五年(一七六八)宗匠として正月十二日に初会を催した折にも、半百韻の興行に加わた者は、僅か総人数十三名であつたが、その連衆に古洗は加わっている。皷氷の同門の先輩として皷氷を支援していたのであり、その後も変わらぬ皷氷の支持者であつた。その詳細は皷氷の「座右日記」に記されている。ところが安永五年になると古洗の句は、皷氷の「座右日記」にも甲斐

の俳書も見ることができなくなる。突然天明元年の敲氷の「座右日記」の十月九日の条に、古洗の物故が記された。翌々日十一日の古洗の法筵には敲氷の追悼吟が贈られた。

葉月末より初冬まで、いくばく日ならぬにはかなき事打続き、古洗も終の烟となりぬ。世にいまそかりしほど、なれもてあそびし誠の草木の霜にしほめる風情を見れば、あるじをしたひけるにやとおしはかられて、袂をうるほしつつかいやり侍る。「帰り花かへらぬ人に手向哉 敲氷」

杜栄は恐らく古洗の妻であつたらう。安永八年頃から俳諧を始めている。同年の敲氷の「座右稿」二月朔日の条に、

帆を揚し船見送るや朝霞 女 杜栄

越えて来た関屋は見えず夕霞 女 翠袖

の句が並べられている。翠袖は敲氷の長男花青（後に山鶏と改号）の妻であり、この兩人の年齢には距りがあつたと思ふが、共に敲氷門下の女流俳人として精進を続けていた。ところが翠袖は天明元年九月十二日没した。杜栄は同友を失つたのに屈することなく、夫もない孤独が、俳諧に熱中させるに至つたためであろうか、天明二年（一七八二）七月廿五日には、四竹楼に、孤石・花青・春夕・潤路・敲氷・為霜らを迎えて七吟歌仙を興行し、探題で余興を吟じるようになった。

此あたり庵結びたき花野哉 杜栄

一本の松に文月のかげ 潤路（以下略）

はつ雁や琴の声する峰の松 杜栄（探題）

続いて同年十月廿三日、同十一月廿日、同十二月七日と俳諧興行を続け、こうした俳諧へ執心は没する天明七年まで継続されている。伝存している自筆稿本「四時発句」には天明四年から七年までの発句を収め、「四時草稿」には天明六

年から没するまでの歌仙と探題発句が記されている。天明七年の年頭には、

ふるとしよりなりはひのかまびすしき物音聞かじと膝をいるばかりの所に炉を開きて老を養ひ侍る。「今年から朝寝を許せ初鶉 杜栄」と記されている。

続いて天明七年一月十二日には四竹楼で探題、同十九日に歌仙興行。同廿八日にも四竹楼で歌仙興行。「鶯や静かに遊ぶ庵の竹 杜栄」を発句とし、「丸めしまゝにまだ残る雪 敲氷」を脇とした。同晦日四竹楼で探題、という傾倒ぶりであった。杜栄は平橋庵の月次会にはもちろん、臨時の興行にもよく参加している。例えば天明七年の四月四日には、平橋庵で、仙湖・敲氷・柳霞・鬼孫・山鶏・杜栄の歌仙一折興行と各、探題が催され、四月廿日にも杜栄・敲氷・鬼孫・溪十・仙湖の五吟歌仙が平橋庵で興行され、後座に各々当座吟があった。そして突然同月廿四日に杜栄は不帰の客となったのである。

折柄長男山鶏も病床にあって容易ならざる状態であったが、杜栄の没後九日にして、天明七年五月三日、三十八歳で没した。相続く最も親密な関係である二人の死は、敲氷の心底に、無常の厳しさを刻みつけたに違いない。明和六年（一七六九）の「巳亥のとし初懐紙」に、年抄と題して「一子なるものになりはひの事打ちまかせて、世の外に遊ばんとするもおかしくて八足ることは知らずや年の暮 鳥我」と吟じたのであるが、その時、家業をまかされた長男（花青後に山鶏と改号）は十九歳であり、敲氷は三十七歳であった。敲氷は俳諧宗匠として一筋に生きようと思う。そのために家業を長男に委ねることは知足の欠落していることだとも反省する。その反省を抑えて一筋に俳諧修行を重ね、宗匠としての地位を確立したのである。明和六年から天明七年まで、約二十年間、知足を知らない自己への反省が、敲氷をして俳諧修行と俳諧指導に心をこめて精進させたと言ってもよいであろう。しかしその背後には長男山鶏（花青）の家業に従事することが不可欠の前提となっていたのである。山鶏は家業に勤めながらも、父敲氷の影響を受けて俳諧

に心を向けて行つた。その詳細は、敲水の座右稿に、その吟が記されていることによつて判明する。例えば安永七年（一七七八）には妻翠袖と共に、平橋庵の月次会や芭蕉忌法筵に花青の号で参加している。また、安永八・九年の「月次五題句合」にも、次のような花青の佳吟が見える。「古大根かこふあたりや帰り花 花青」「初潮や迷うて歩く鶴の声 同」「梅が香や氷柱のしづく夜もすがら 同」

こうした花青の俳諧への努力は結実して、その作品も高く評価されるようになり、父敲水の俳諧指導を補助することも強められて行つた。例えば天明五年二月廿日の笛川舎での聖廟法楽の会の点巻（草稿）を見ると、玉朶・平橋・茂林らの十二吟百韻が興行され、それに加えた如雪庵尺五評によると、天は花青、地は曲肘、人は玉朶となっている。また、「天明五乙巳年初陽、臨時会草稿、於平橋庵興行」と記されている七十二丁の冊子から、花青の参加している作品を摘記すると次のようである。

人日歌仙―路杏・平橋・旧鴉・春夕・杜栄・花青興行。正月廿五日法楽半歌仙―紫明・松秀・花青・敲氷興行。二月廿三日兔秀上人十三回忌表六章―敲氷・花青・曲肘・元斎・曙白・執筆興行捻香。上巳三吟歌仙―杜栄・平橋・花青興行。三月十一日歌仙―杜栄・平橋・花青・旧鴉興行。三月十七日歌仙―龜泉・敲氷・夜涼・文川・朝鴉・花青興行。四月十三日半歌仙―雅路・平橋・花青興行。六月廿日歌仙―潤路・敲氷・瑚石・杜栄・花青。六月廿三日十二章―可候・敲氷両吟。七月十八日十二章―百花亭東武へ赴くを送りて―夜涼・蚊雷・平橋・花青興行。七月廿八日夜座歌仙興行―露敬・平橋・除来・路杏・杜栄・花青六吟。九月晦日瑚石送別歌仙―杜栄・瑚石・平橋・花青・除来・路杏・春夕・旧鴉。十一月十四日歌仙―仙歩・平橋・阿東・川長・白眉・北馬・花青。十一月廿八日夜半歌仙―杜栄・平橋・花青。十二月七日歌仙―美容・花青・春夕。十二月九日夜首尾吟―美容・花青。十二月十四日半歌仙―三車・花青・平橋。十二月十六日歌仙興行―麗山・仙歩・平橋・白尾・白羊・春夕・川長・花青。十二月廿三日十二章―三車・花

青。

臨時に平橋庵で興行された俳諧興行数廿六回の中、十八回は花青も参加しているのであって、敲水の留守の折は庵主代理として活動していたと思われる。更に天明六年一月に花青を山鶏と改号している。天明六年の「月次句競草稿」は八十八丁で、表紙に「天明六年丙午春夏之部」とあるので恐らく秋冬之部もあったと思われる。それは天明五年の「月次五題句合」とほぼ同じで、催主は山鶏で評価は敲水であったと思われる。「坐右稿」の天明六年十月二日の記事に次のような文章がある。

山鶏の招き侍りしをいなみなく、東西の諸好士寄りつどひて一盃一興に夜のたけなはなるをしらず。猶明るあしたも、たゞには過ぎさじと聞えけるに、「夜遊びも朝寝もまよ神の留守 氷」を発句として歌仙を興行し、翌三日には山鶏のもとに会して、おのおの探題小春」とある。

この文章は何を意味しているであろうか。敲水は門下知人を招いて山鶏を平橋庵の後継者と認めて貰いたいと訴えたのであろうか。少なくとも多忙な俳諧指導の代理者として認めて貰おうとしたのであろう。敲水が頼るべき後継者と意図していたその山鶏が天明七年四月廿六日に没したのである。家業を相続させ一切を委せ切つて、安んじて俳諧三昧に過ごして来た自己、そして今や俳諧において自分の後継者と目する程に成長してきた山鶏。その人生無常の突然の死に遭遇した敲水は、涌出する愛惜の情と限らない哀傷に耐えることはできなかつたであらう。一箇月余の日記の空白は敲水の心底を物語っている。

一周忌に当たる天明八年五月には、追善集「茶の嗜」が刊行された。その序で敲水の高弟時節亭秀外は次のように述べている。

なまよみの甲斐の国なる山鶏子、去年皐月三日花橘の賀なる齡を捨て、むかしの人の数に入りぬ。かく短か夜の短か

かるべき契りにや、夕ばなのさかゆる程は、其の産業をよく整へて人におとらず、扇枕温床の孝に心を尽くし、いとまのある折々は慈父平橋宗の伝をうけて、風雅にすゝむ事尋常ならず。折ふしのことぐさもたくみに哀れなる作意も聞えしが、行くものは速にして、しばらくも躊躇せず。夢山の花の眠りもほととぎすの一声に覚めやすく、差出の磯の夕は、しぐれの空に立ち替りて、はやくも一めぐりの其の日に当たれり。されば追悼の句々を集め、是を梓行し供花捻香にもせんと、うらなき旧友たれかれかたらふ。

秀外の序は山鶏の人物や行動を簡潔に物語っている。

杜栄・山鶏と極めて親密な関係を保ってきた人々を相ついで失い、人生無常の觀念に強く支配されていた敵水ではあるが、五月廿九日の守黒忌には翻然として俳諧宗匠の活動に復帰した。守黒忌とは、守黒庵柳居の忌日のことである。

柳居は幕府直參の武士、佐久間三郎左衛門である。享保十六年（一七三一）九月、当時長水と号していたが、宗瑞・蓮之・咫尺・素丸の四子と共に「五色墨」を刊行し、沾州の俳諧に反対し、江戸に蕉風を復興しようとした。また芭蕉七部集を選びもして、寛延元年（一七四八）五月廿九日没した。俳系は次のようである

芭蕉翁桃青―麦林舎乙由―守黒庵柳居―抱山宇門瑟―平橋庵敵水

敵水や尺五等は守黒忌と芭蕉忌とは必ず法筵を設けて供養している。その追善供養をすべき日を契機として、敵水は我が選んだ俳諧の道に精進し指導すべきであると立ち上ったのである。守黒忌には五十韻が興行された。

「うすのうたは古風を守る麦粉哉 水」

「末葉栄ゆる夕がほの夢 鬼孫」（以下略）

「坐右稿」を見る限り、多忙な敵水の指導は変わることなく続けられた。大きなショックを乗り越えて活動は殆ど中断される事なく営まれた。そうした状況の中で吟じられた敵水の発句として無常觀の浸透した句が多くなっている。

娑婆はただ木賃宿なり魂祭（七月十四日）

燈籠しまうてくらき柴の戸（七月十七日）

秋の夜や鳴かぬ鴉の工夫せん（七月廿九日）

雁の文を見るに付けても袖の露（九月七日）

題目を書いて納めんことし米（九月十九日）

天明七年中の敷水発句数一一〇句。一箇月余の空白はあったが、俳諧に支えられて、挫折の危機を脱したと思われる。

天明八年（一七八八）五十七歳

一、俳諧活動の実態

天明八年における俳諧活動も、「坐右掌記冊初陽」・「坐右稿孟夏」・「同季秋」によって、その全体を把握することができる。

（一月）元旦の発句は、閑居口号と題して、「うへもなきひなたばかりぞ今朝の春 平橋庵敷水」と記されている。老齡となった敷水が元日の晴天の日を迎えて、日向ぼっこを喜んでいる姿を想像することができる。近隣の人々も祝賀に來訪した。（二日）左城は旧年より淹留していたが今夕郷里に帰った。春興の吟十一句。「川添の関屋にたるる柳哉 水」
「葉は虫も喰はで奇麗な椿哉 同」「鶯や朝も酒飲む詩人達 同」「学寮に雪うすらげば梅の花 同」「年ごとに梅より白し眉の霜 同」「植木屋も松引に出る子の日哉 同」「うぐひすや宮居も宮居松も松 同」「隠れ家に耕さでとる菰哉 同」「白魚や白きを見ればまだ寒き 同」「夜市見に出る人多し臘月 同」「藪入やかも川越てただ一夜 同」（右の句社中早春小篇に加入）（五日）県令里川來訪閑談。（六日）「梅がかやわざく廻るにり道 麻丸」（七日）「七くさや鶏に

近よる摘処 水」(九日) 昨今両日庵居間の疊修覆に助七郎来る。野子左の足腫物にて昨日より痛甚しく歩行なりがたし。(十一日) 春貝人来。予の足の腫物療治する。今夕春貝神農祭へと招く所、足痛でことわる。神農祭は漢方医が冬至の日に医薬の祖として神農氏を祭ることである。神農は中国古伝説の三皇の一で人身牛首で、民に耕作を教えたという。また百草を嘗めて医薬を作り、五弦の瑟を作り、八卦を重ねて六十四爻を作ったとも言われる。(十二日) 初会連衆廿二人。おのく題霞。晴れて見んよりは絵嶋の薄霞 水」(十三日) 春沢入来。「朝夕にみればこそあれ糸柳 春沢」 「みなもとは木葉浮ぶや雪解川 同」「冬日吟、并に歳暮口号 どの家も留主のやうなる寒さ哉 水」「川水や行年も又此の通り 同」(十六日) 来客仙笛・蔵六。刃見利躬より用事のせうそこ来る。(十八日) 鯉尺来訪。「余の木々によらずさはらず柳哉 鯉尺」(十九日) 伊勢丹生乙艸よりせうそこ来ル。其中に一、俗談平話をただすと申人、親方支考或時四五輩寄桃の発句致事有。「出女と先の花とは遠目から」と致し、手油をぬりたる句を出し候処、麦林は寐倒れて居申をせつき申候へば、彼「畑打ッ肩の脱はじめ」と申。何れもヤンヤンヤと申候。麦林申に我等はぬめりあやつりもなく木綿物の肩にて人也と申。ぬめりあやつり織物にかけて興も候と神風館主曾北の一つ咄にてござるべき。麦林云ク詩文章に風雅有を知って俗談平話に有事をしらぬ人多しと申き。

一、野生八十余齡立越、人に面動おもてうごがられ候もいやにて引込候て居申し候へ共、折々尋候人も之有候。先比鯉振翁廻状到来其夜に罷出候所亭主何れもつはもの達也とて、先づ探題発句、野生は即腹を取あたり、「吸はずとも死にもせましやふくと汁」と申し、其の後又水仙の題にあたり「水仙や余所の弛走に嗅出され」などと申余し事にて、其外句は咄不申候。此地うづら餅御噂 是は弘仁年中丹生の深山にて承うづらを堀、いかふ賑合申し候由、其時大師の御教にて作候由、承にうづらふけるなど申候は、祝詞にて候よし。丹生の承は烏丸光広卿職人歌合に有之候。うづら餅は、「つかかれぬも味にふけるや鶯餅かず喰いつゝも休む旅人 西行」「旅衣立よる茶屋にもの問へばうづら餅とてねこそ高けれ 高野山寛彦法師」

(下略) 近日麦林茶話一帖御座候。暖氣に趣く間写して入御覽候。右乙艸文通。去十二日来ル。「吹越て霞が関や鳳巾東武生徳」「豎横に迷はぬ道や闇の梅 同」「青柳やしばし慰む鬢盤 同」「月よりも窓に明るし夜の雪 古尺」(廿三日) 春目入来足療治。徐行・成川・鬼孫閑談。引蝶文通。今朝武江西村源六へ書籍の用事状出す。昌久来訪療治。うかひ山初会、題臘月。「宵ながら夜明に似たりおぼる月 水」いまだ足の痛み不癒依て短冊ばかり贈り侍る。黄昏元ざね来訪此のほどの工案也とて、「暖に更る雨夜や鳴蛙 元ざね」(廿五日) 求風亭、天神講へ招かる。今朝鶯始めて啼。「鶯の背中ぬくめる旭哉 水」(廿六日) 足痛再発。午時悪寒。(廿七日) 霜飛子予が草の戸に肘まくらして一夜明されけるが、曉方より雨降りいでてしめやか也。笹垣づたひに鶯の一声ほのめかしたるこそ、けふのあるじまうけ成べけれ。「鶯や糞に着るなら何の花 水」「朝茶の咄尽ぬ春の日 飛」石牙文通、「梅がかや今宵は空の初くもり 石牙」今夜百朶上人入来。近日東都旅行の物語。(廿八日) 山水画賛、如雷の需に応ず。「塵の世を笑ふ太山の住居哉 水」(晦日) 元三郎来訪、扇に発句所望。

(二月)(朔日) 初午。「初午や和田の子孫の幾屋敷 水」右、稚羊・佐楽の小篇に戴す。今日求鳳亭にて先祖法筵。(二日) 文通、「朝寝して見はぐれにけり春の雪 青鳥」(三日) 昌久入来療治。「うかひ山百朶上人関の東に赴るゝを送る。清澄の昔の跡や遠霞 水」。鱗走亭のあるじは腰に横たへし秋の霜を如意一握に換て老を養はんとなり。されどすみのおれ木のはしのやうに見えんとも侍らず、年立帰る春霞には遠遊のこころ動く成べしなどほめかして申贈る。「誰やらに似たる茶染を着そはじめ 水」着そはじめは、江戸時代、正月新衣を着始めること、あるいはその儀式を言った。ここでは前の意であろう。並木氏仲亮ぬしは、かしらのおどろおどろしきままでますらをの志ゆるべざりしが、をととひなる何がし大僧都の遺誠を信じて、去にし冬僧都の後の事いとなむつるでにみづから剃刀をとりつつ「丸めては見所もなし松の雪」と打吟じ聞えしは、思ひとりたるみさほいと頼母しく覚え侍る。「桜符の魁や嘸あみだ笠 水」。(六日)

金八、秀外届物携え東武より来る。(七日) 今日岩泉山・向富山へ年礼に赴く。尺五来訪、泊り。(八日) 如雪叟は三歳ばかり東都に有て此のきざらぎ草の戸を叩かるゝに、うつりかはる事ども今更黙していはず。只かたみに老を感じ侍るのみ。「年々の白髪や花に似ても似ず 水」「余寒同じ老のくりごと 尺五」、鬼孫一座して三吟歌仙興行。仙斧来訪、夜話に及ぶ。(九日) 東谷来訪。今日尺五府下へ赴く。木犀居のあるじこたび青囊を携て西山下に家居を移さるゝをほぎて見送り侍る。「萌出づる百草の香や道すがら 水」渡辺元国荆沢(現、甲西町)へ転居。(十一日) 九日夕方八代へ行て二夜泊。(十二日) 定会連中入来。(十三日) 来客池水。「老て知る粥のうまみや齋の日 池水」文通、「梅咲や漬菜の味も飽き心 甲府 亀六」「降るほどはたまらず流石春の雪 亀六」(十四日) 秋江来訪、歌仙一折興行する。「まだ寒し花からしらむ明の鐘 秋江」「名残をしみて山めぐる雁 水」。今夕風邪にて宵より臥す。(十五日) 桂翁隠士は山林にかくるるにもあらで、目にもろもろの塵を見れども、ころにもろもろのちりに染まず。行ひ正しく明しくらして、ことしきざらぎ根の国に赴き玉ふを悼む。「雁のなごり耳ふり立てて聞く夜哉 水」「納豆もけふを名残のねはん哉 水」(十六日) 長瓜病気快気、今日年礼に入来。(十七日) 信州中野宗氏より文通。「竹輿背負ふ人に逢たり臘月 巴龍」浦の朝見に出て磯菜摘にけり 桂岡(十八日) 谷村小俣氏梁父去年臘月物故のよし聞侍りて、こたび申贈る。「煤掃や日頃の反故をかたみわけ 水」(廿二日) 加賀美中条(現、若草町) 筍芽七十初度賀短冊所望。七くさの粥や十度も飽はせじ 水。(廿五日) ことしも平橋庵老師に面あはせし事嬉しく、「人間同じからねど梅の笑ひ哉 上総吐虹」「又春興、梅一りんころは正月二日哉」(廿八日) 昨夜より卜志居士廿五回法筵に招かる。午時より石和へ年礼に赴く。

(三月朔日) 東都文刻堂より書籍来る。(二日) 信州中野より文通。去年十月十二日賤之舎会の発句なりとて、「落葉せく水や蛙の斧の跡 桂岡」(三日) 「顔見れば年々若きひるな哉 水」(七日) 山梨へ行て夕暮帰庵。「古岡子はことし如月いちくらを構えて、なりはひめざましくつとめんとなり。頼み浅からぬ志にめでて、末広きものに筆を染めていわる

侍る。「雪解にも似たり米炊す背戸の水 水」「牧笛庵主をことしはけふはじめて訪ひ侍るに、佳節は過ぬれど桃の花
水」。向岡舎にあるじもうけして黄昏に帰庵。(八日) 長瓜不快にて八代へ行。夕方帰庵。(十二日) 月次会。定連入来。
桃園(現、櫛形町) 桃李勸進で七面宮奉納。「朝夕のぬさに捧げん玉椿 水」「雨中花。常磐木のいよく青し雨の花
尺五」(十四日) 鹿笛・松波、甲府より帰り来訪。「音のなき池を動かす柳哉 松波」「翌の空眺る夜半や初ざくら 同」
(十五日) ひし山菱狐・古柳来訪。「色も香もいつもかはらぬ桜哉 菱狐」「乙鳥も稀に通ふ柴の戸 水」「誘はれて我
も来にけり花の庵 古柳」「摘でもてなす茶晶もなし 水」(十六日) 誓願寺観音大士開帳に詣で、小池氏(琴河)の
許に遊ぶ。洛の蝶夢法師木姿といふ人相伴つて訪はる。留守にしかじかの事書き残して通行する。行脚文靜投宿。豊後の
国なる文靜子松島きさがたに祖翁の履の跡をたづね、武隈の松に二年越の旅居せしかへさ也と聞ゆ。風雲万里の日黒み
を一碗の茶にねぎらひて、小庵に一夜うすきふすまをかし侍る。「旅にやれし露の衣菅の笠 水」「花に分入る春の野に
山 文靜」「此の庵や朝には花暮の月 文靜」「雪も残らぬ春の元山 水」(十七日) 末木(現、一宮町) 雨宮甲泉ぬし
の落髪を賀して贈る。烏仙子の厳君ことしは頬におどろの髪のうるさくなりぬとて、鼻祖の遠忌の法筵にさまをかえて
墨染にかずまへられぬ。されど坐禅に膝をかゝめず、誦經に声かくさんとにもあらず。松魚も花とかきなせば、めで興
じ、茄子も鳴焼と聞く時は口を閉づ。戒律は心の底にあるぞいとかたじけなく、這箇の一句を贈りものとなし侍る。「行
く春も来る夏もげに無門関 水」(十八日) 洛の幻阿上人来路に錫を飛して、予が草の戸を叩かるゝ日は外に出てたい
めせず。しかくの事筆染置きてはやりかにも差出の磯つたひにいそがれしが、ほみなくて、落葉庵たづねてせうそこ
贈る。其はしに口ずさび侍る。「庵に花あらば一夜はあるじせん 水」「野こえ山越へ蝶のせはしき 幻阿」。落葉庵主
文通の答へのおくに、「山畑や一木立たる遅ざくら 石牙」(十九日) 善光寺開張に参詣する。立川不動尊奉納軸に「誰
も誰も七日籠るや花の瀧 水」秋葉山奉納夏季にて勸進「籠り人の火に怪我もなき蚊遣哉 水」(廿二日) 徐行和尚

碧岩一則講演。(廿三日) 郡内追分の人々来訪し、玉雲法師の「杜若小篇」の議談す。(廿四日) うかひ山会へ行く。百
架上人に仕へける少年のもとゆひを賀して「萌出づるすゑ頼母しやをとこえし(水)(廿五日) 笛川舎は回祿の後礎を
あらためて市を隔てることいよいよ遠く、山に對すること猶近し。魚売の聲は聞かぬ時折もあなれど、木こりのうたに
はうとからずといふべし。戊申のとし弥生、あら人神の御忌の日みきを捧げなら茶かしぎわたましの賀筵に招かるゝは
例のころざし相しれるどち也。下りの供御は舌打して句のつらねは百韻にて満ちける。「夏近き庵や飯櫃に青簾 水」
右元斎に贈る。(廿七日) 花青より餅を贈りけるせうそこの次手に、古城跡に遊びしとて「蕨とる山とはなりぬ城の跡
花青」百々村(現、白根町) 清水亀三郎奉納句合懐紙携え来訪。(廿九日) 月次句合の用にて山梨へ行く。留守に五原
来訪。「行春や留守の庵の棚さがし 五原」程なく帰りて「一夜は泊りふねの花主 水」と脇をつく。(晦日) 斗十・古
硯の両士其外にも二人みたり熱海のいで湯にゆあみして……上野浅草の花に興じ、品川芝浦の鰹をも尋ねんと也。され
どたらちねのおよびかがめん日夜を恐れて、いへぢにかへさの道々も口すさびしことども也。やつがれにも聞かせんと
草の戸叩かるゝに對面す。「むさし野のすみれに幾夜旅まくら 水」

(四月朔日)「産月のはづかし気なり更衣 水」(三日) 明道一周忌。(四日)「平橋庵に遊びて、「卯花の垣根に塵もな
かりけり 渭川」「訪ふ人稀に麦秋の暮 水」歌仙興行。鬼孫を加え三吟。(五日) 渭川逗留し昨日の歌仙を継ぐ。(七
日) 善光寺へ參詣する。(八日) 灌仏や産着は苔の花衣 水」(九日) 一案来訪閑談す。「とつ国は水清うして燕子花
水」(十二日) 定連好士入来。七ツ時百韻満尾。「葉桜や鳥にはあらで栗鼠の聲 水」(十六日) 夏明ぬしの母なん身ま
かりし比はやつがれ心地れるならねば、こもり居てしらず。此ほどしかじかの事聞きけるが、夏明ぬしが孝心はかねて
知り侍る事なれば、「竹の子を手づから搜す忌日哉 水」(十七日) 四日市場(現、石和町) 連中へ問訊す。(十九日)
三社御祭礼。「いこひして初音聞かばや杜宇 露蟲」「雨やどりにもうすき葉桜 水」(廿二日) 閑水奉納句合懐紙持ち

来る。(廿三日) 魚藻来訪、「運斤録」かし遣はず。(廿四日) うかひ山月次会へ会す。阿蘭陀人の筆すさびける山水の文字に発句せよと、うかひ山主の求めに応じて「山も水もさだかに見えね横がすみ 水」(廿七日) 廿五日到来せる文通。元旦口号。「鸞鏡といふ古き唐の鏡一面二十年来筐に隠し置けるを、予古稀のよはひの年にも取出でず、ことし七十五才になりぬ。此かがみを以て照らし見るに我はた老たりと感じて、稀人に出合は我や初かぐみ 抱山宇」、「田に月の浮きはじめけり杜宇 霜後」(行さりて水の回るや燕子花 同)「こっそりと春の色もつ柳哉 乱竿」(梅咲て菓子売出たり神社 同)「炭俵積は分限や冬籠 同」(初霜や冬菜に味をつけるほど 同)「狐火の生魅見たり網代守 同」(廿九日)「ちよっと聞いて迷の種ぞ郭公 水」(竹を出て竹よりも猶青すだれ 水)「びるどろの細工に似たりけしの花 同」(中々に木曾路は寒き若葉哉 同)「螢見に誰やら床し袖香炉 同」(後藤氏の扇に一句を望まれて、「福寿雙全といふところを、福はうち齡は舛の豆の数 水」和田(現、甲府市)連中勸音大士奉納の需めに勸進す。「身をこらせ霜ふむ道を朝もつで 水」(二日) 山鶏小祥忌速夜に百染上人・風条法師を招く。元斎・鬼明両子は追善集の催主にて侍れば今夕招いて、集の稿を談ず。小祥忌追善に歌仙一折つらねて、各々発句、「あやめに懐旧のころを、「あやめ草伸つつ過ぐる月日哉 水」(四日) 追風の遠江灘行春ぞ 元ざね」「富士は今朝晴れたま、也更衣 同」「行方は人なき島ぞ 杜宇 同」(五日)「慰斗箱にのせて置たり菖蒲草 水」(七日) 魚泉(前号平坡) 新宅「濡色の壁匂ひけりあやめ草 水」(八日) 竹呂求風同道にて雅俗の事物語る。(十二日) 定連の人々入来。四国八十八所とかや、山を越へ海にそうて高野大師の履の跡いと尊し。梅牛ぬし、ことしかの霊場残るくまなく順礼して、さつきのはじめ家に帰らるゝに菅のをがさの破れも殊勝にぞ覚え侍る。「さうぶ湯に入て養へ旅つかれ 水」(十五日)「遅しき手に刈らるゝや菖蒲草 拾露よりの文通。(十八日) 十七日より逗留した鴉路と両吟歌仙興行。「竹植ゑて遊ぶや庵の五月晴 鴉路」「茶の口とりに麦粉わびしき 水」(草稿残存。(十九日) 鴉路ぬしと四竹楼に遊びて昼餼す。(廿日) 善光寺参詣。(廿三日) 栄名井

主人（本名は上野広俊、甲斐二の宮美和神社の神官。号は聡翁）来訪す。（廿四日）うかひ山会。当座題ざくろの花。「つくづくと塗師の花見るざくろかな 氷」（廿五日）古府の如雪庵は去年の冬丙丁童子の為に一時の烟となりぬ。庵主は武江に有りてからきめも見ざりしが、年頃ほり植置し草木の焼野に荒果てやしつらんと、きさらぎはじめ立帰りしに、色をも香をもしる人少なからねば、力を合せて再び庵結ばんとなり。されどしばしがほどはたびるもおかしからめとて、丸屋といふめる人の客席をかりのやどりとするに、朝け夕けにはかならず隣ある成べし。打絶えたりし月次の会もけふより催すよし告られて、五月雨の日の物うきを忘れ侍る。「今日の客に早乙女入れて六歌仙 氷」（廿七日）彫工閑能斎「五考集」のことにて来訪。（廿八日）下小河原（現、甲府市）の本教霊神へ詣り帰りに、観水庵に立ち寄る。「母の喪にこもり居る人に申し贈る、夜ごと夜ごといまますが如く蚊やり哉 氷」（晦日）「守黒忌、よき折にあふちの花や 閼伽手桶 氷」「百味の数に藜竹の子 元斎」例年の如く五十韻興行。（草稿残存）。今日雨甚しく渡船留まり、連中往反なり難く両三人にて興行。草稿には「守黒忌捻香発句、天明八年戊申歳五月晦日於平橋庵興行」もあり、題、田うた・水鶏・樽、と記され、「かけまくもかほる樽や此の忌日 百采」を最初に十四句が掲げられ、東武に贈ると記されている。

（六月朔日）昨日法筵後座の作、「水晶も有りと告げけり氷室守 竹翁」「かきくもり降る物は何氷室山 童歳」「轍も冬のまゝなり氷室守 氷」「美濃あふみ境の知れぬ青田哉 氷」（二日）「遊ぶ子に笠を譲って田植哉 春沢」（四日）山梨岡の両士を訪ふ。龍沢山に泊って性海大和尚の碑に香を点ず。今井氏亀六ぬしの旅宿を訪ひけるに即事とて、「此の暑き日を忘ればや夏茗荷 亀六」「門の青田に青き敷もの 氷」（八日）梅花斎に会す。題清水、物凄く成って立退く清水哉 氷」題社頭の夕立、「白雨や再び洗ふ神輿哉 氷」（十一日）蘭更（高桑氏、諱は正保、蕉風復興期に活躍した俳人の一人）黒沢坊来訪。「木曾山や花に吹き込む雪おろし 蘭更」「忍び音や耳とき人に郭公 同」「夏の月瀧の水 upper

澄みのぼる。同「ひるがはや日に咲きむかふ花みたし 同」「六月や雲紅にまだら富士 同」。「今彫し仏にそぐ清水
哉 黒沢」(十二日) 定会百韻興行。「月とりに猿の集まる清水哉 平橋」「伸たきまゝに谷の夏草 花青」定会の百韻
は「百韻 天明戊申歳林鐘十二日、於平橋庵興行」と記された草稿が残存している。また、発句は平橋・花青・童歳・
鬼孫ら十三人の句が収められ、平橋代として秀外が判者に当たり、天は和鳴廿七点、地は如翠廿五点、人は如雪廿四点
となつてゐる。(十七日) 閑能齋来訪、板行用事。(廿日) 鎮目(現、春日居町)の一樹軒会に赴く。当座夏菊で、「夏菊
や花垣も匂ふあやめ草 水」「みな月廿日真光山の密寺に遊びて、「傘松に涼しき風も水も有 水」(廿三日) 文通、「竹
婦人風の夢こそ嬉しけれ 黒沢坊」「浴衣着てふきふき出し夏の月 同」(廿四日) うかひ山会。「蓮咲くや朝々習ふさ
うの笛 水」「夏明けて見れば殖たり窓の竹 同」(廿五日) 酒折善光寺参詣して一条町まで経過し帰る。(廿六日)「昼
顔の盛にいとふ暑さ哉 秋江」。(廿八日) 梅牛来訪。正月二日発足、いせより西国・四国順礼致し候よし。春任東武の
かへさ来訪。「両国橋に出て暑さを避く、舟と橋風はなくとも涼み哉 春任」。(廿九日)「ふしぎなる神風立ちぬ夏抜
水」

(七月朔日) 文通、「合点してゐても倦たり五月雨 乱竿」「水で飲む菓の売れる暑さ哉 同」。「夕立や止む頃絶ゆる人
通 水」「夕影の花や屑屋の軒伝ひ 飛沢」「涼しさや蓮から運ぶ風の日 同」(二日)「桐もまだ秋とはしらぬ暑さ哉
水」今日、月次百韻興行、定連入来。「竹の葉の落つるは落ちてけさの秋 尺五」「桐翠問訊吟、朝がほや覗きあきたる
片折戸 桐翠」(四日) 八代仙湖齋主人の臥病を訪ふ。病中こと書有りて「蚊屋を出て床はなれせん宵の月 桃溪」「命
を延ぶる秋の初風 敲氷」(五日) 甲府官舎渡辺氏を訪、風患坊又金ぬしを訪ひ、如雪庵の会に行き、夕暮帰庵。引な
れし弓の強みや今朝の秋 水(六日) 閑能齋板行用事にて来訪。(七日) 星夕、「物書てこよひ棍にも巻葉哉 水」。文妙
禅尼(石村大光院の尼) 御岳の奥の湯(黒平の湯)にあゆみしてかへさ、水満ちてわたり絶えければ草庵に一夜草のま

くらかし侍る、「空ならばこよひは鳥の橋懸けん 氷」(十二日) 仙湖齋のあるじの病を訪ひに夕暮より行て、初更過に帰庵。(十四日) 此の竹は初元結の年を過ぐることにいくばくならず、ことし五月雨の雲に入てはかなき名をのみ残す。

つるならぬ世のならひとはいへど其のふしは夢の心地して椿萱に対しても、詞さへなく過ぎ侍りしか。盆会に至りて社中の句どもかいつらねて贈る。ついでにやつがれが志をも述べける物ならし。「植ゑ置きし薄やまねく玉祭 氷」(十六日)

「をのづから床しき菊の薫り哉 素鱗」「昼は灯籠も荒し柴の戸 氷」午時より八代に行き夜に入りて帰宅。仙湖の見舞に行つたのである。(廿日) 仙湖齋主人没故告げ来る。(廿一日) 八代に行く。(廿二日) 夕陽帰宅。(廿四)「かも定經神靈三十三回句勸進、藤よりも細き鯨を手向哉 氷」(廿五日) 前夜川支、八代(現、八代町) 法福院泊り。三樹投宿、「ばせを葉にたよりてこよひ雨やどり 三樹」「返し「ばせを葉の雨きく客ぞ頼母しき 氷」(廿六日)「蓮散つて暑さ見えけり水の上 桑里」「川岸になだる、幣や今朝の秋 同」(廿七日)「古丸ぬしやつがれの下戸なるを憐みて手自らもちゐを製し袖にして訪るゝに謝し侍る。花餅のかいしきにみるも花野哉 氷」。童歳同伴にて来訪、三吟にて歌仙興行す。夕陽希真来訪。(廿八日)「木の皮を樋に作りて清水哉 運水」

(八月朔日) 春竹・吟朝来訪。(三日) 川中島(現、石和町) 山五社奉納軸に「神領へ猿の出て引く鳴子哉 氷」。(五日) 仙湖齋道義居士のかたみに紙衣贈らる。(六日) 求風亭に遊んで莊子を読む。(九日)「栄名井あるじ、ことし初秋の末不尽の裾野たどりて、あすみの海見めぐりし逆旅の記おくり玉ふ。披き見るに耳目を驚かしてすゝろに酔ゑるが如し。「紀行に見るも言葉の花野哉 氷」「秋懐舊、広聴うしの北堂大祥忌 秋草と成りて月日を朽葉哉 氷」(十日) 北山和尚来訪。「初秋やはやものの葉の翻り 春沢」(十二日) 定連入来。百韻興行。(十五日) 夕方より雨降る。「山と水なくてはならずけふの月 氷」(十六日)「いざよひや盃持ちて待うたひ 氷」(廿一日)「香にめでて虫も覗くや菊の庵 夏明」「月の出しほの速き山陰 氷」歌仙興行。(廿二日) 敬江・元来らと当座、駒牽・引板の句あり。「駒牽や振

返りみる木曾の山 氷「猿叫ぶ声より淋し引板の音 同」(廿四日) 露敬・秋江・夏明の三婦人の菊の句を持参し訪わ
るゝに謝し侍りて、「作らねど我は貰ふて菊の庵 氷」(廿六日) 金峰十余年を経て来訪。法鉢と成つて浄恵と号す。此
ほどは京師に侍る由、松島行脚のかへさ也と聞ゆ。言葉書に西行上人のことを述べて、「君も命我も命の花野哉 浄恵」
「互に竹の杖も幾春 氷」かの長檀十合のゆゝしき古ことにはかはりて、風流いと恭く覺え侍る。「宮城野の萩探りみ
ん頭陀袋 氷」(廿九日) 天目山人来訪。今夜雨降りにて天目山人と夜話す。

(九月朔日) 竹呂と雅俗の談あり。(三日) 善光寺より正の木まで参詣す。(四日) 巨鯨首座自性寺を去り遠江国に赴き
侍るよし。立寄りて別を告ぐ。とりあへず扇に書て贈る。「花野には西も東もなかりけり 氷」。今日山梨岡より鎮目ま
で行て夜に入りて帰庵。(五日) 青竹催主にて廿八番角力句合をなす。その奥書に「相撲はうち隔たるうちこそおか
しけれ、はた負けぶりのいさぎよく見ゆるもわざにくはしきなるべし。「組合て手におわ尽くす角力哉 氷」(八日) 道
義居士五十日法筵に招かる。(九日) 菊を見て感あり。「愛さるる白菊に似よ我が白髪 氷」(十日) 今夜舟渡さず。百
朶上人投宿。歌仙一折興行。「いざよひの月や欠けたと思はれず 百朶」「木賊に水を替る生筒 氷」(十一日) 前夜長
瓜なら田温泉より帰り候よし物語。文明尼柳美より文通持て来訪。文通、「名聞の家を離れて野菊哉 柳美」「百姓の酒
食む二百十日哉 同」「女子なら斯うは歩行かじ草の露 柳止」「初汐や常より低き橋の友 同」(十二日) 雨降、終日
舟わたし留り定会連衆入来十三人。(十三日) 希真・元齋来訪。「夜学せんといひ合せけり後の月 氷」(十四日)「秋立つ
や鳶の手を出すさらし杭 黒花」(廿日) 高橋常德寺に於て百韻興行。おのおの題露。「降りもせず湧きもせずして草の
露 氷」当座暮秋、「行秋や海は青くて物すみき 氷」。秋堂子は花の会のかへさに心地れいならぬよし聞えしが、菊の
露もいたづら事になりぬるはかなさ便りに驚き一句を手向侍る。「折入れて秋も此の世を出船かな 氷」万候ぬしを悼
む、「芳しき名は凋まねど菊の霜 氷」(廿一日) うかひ山中嶺南窓にて、秋釈教「経塚に妙なる声ぞ蟋蟀 氷」(廿三

日)一樹軒に会し、五十韻。おのおの種瓢、「五条にも売ほどはなし種瓢 水」(廿七日)予が病後を賀して「露に逢うた道とは見えね菊の花 狐菱」「いつしか蝶も老て行秋 水」(廿八日)「霧立ちて見すとやいはん須磨明石 水」「薺や目医者 of 門の賑しき 同」「初雁やまだみな道々の人は見す 同」「御射山の道埋みたる尾花哉 同」「名に立た菊はなくとも菊の庵 同」(廿九日)廿二日より今日迄長瓜逗留。伴真章来訪。西山一之瀬太神宮奉納軸に「伊勢笠を着連れて神の田刈哉 水」

(十月朔日)昨夕三吟歌仙興行す。「しぐるるや鷹は濡れてもわるびれず 水」「北風寒き野路の明ぼの 童歳」(二日)

求風亭にて読書。(三日)府下へ行く。(七日)岩泉山へ参詣。今夜求風亭に夜話。(八日)三峰別当代新井利兵衛来訪。

(十日)加茂より落合へ。(十二日)祖翁忌。「時雨には旅人と呼ばれ、初雪には庵に罷有る風雅の句在り。おふげばいよいよ高し、魂招く日や寒菊にみそささる 水」例年の如く五十韻興行。連衆十五人。文通、「夜時雨や目覚めて見れば月も漏る 石牙」(十三日)うかひ山参詣。(十四日)今夜岩泉山十夜へ詣づ。(十五日)うかひ山使僧来る。羽容十七回忌に句をもとめられて、「見せばやと魂招く日に雪丸め 水」(廿日)「紅葉屋に紅葉焚きけり夷講 水」(廿三日)「初秋や水も齒にしむ奥の院 運水」後の月障子にさはぐ竹の陰 同「湯豆腐も目には寒さよ後の月 同」「聞かぬ振見ぬ振もある頭巾哉 同」(廿四日)黒花・栄名井来訪。「宿引の濡れ立つしぐれ哉 黒花」「猿引の菝提げて行く時雨哉 同」「蝶々や菜の葉流るゝ水の上 同」「永日や番匠連て山めぐり 同」「草刈に付て下れば清水哉 同」「萩咲や歌よみ習ふめのわらは 同」(廿六日)功德山に招かれて百韻興行。各題水仙。(廿七日)東武文通、「達魔忌や芦踏で汲む関伽手桶 秀外」「秋の鳥の山から来たり初しぐれ 元ざね」「ばせを忌やけふは藜の杖売らん 秀外」(晦日)一日百題発句興行、連衆十一人、暮六ツ過満尾。

(十一月三日)山鶏無尽連中入来。七人泊り。(五日)午後より鎮目へ行く。(七日)文通、「町もけふ一日しぐれて暮

れにけり 元ざね」「初時雨茶の待合に聞日哉 竹瓦」「今に落葉を見せぬ柏木 元ざね」（八日）梅花齋会、おのおの霜を題に発句。凌冬居のあるじ如想来訪。「あちらにも又こちらにも几巾 如想」「麓から迷ひ迷ひて初ざくら 如想」「達磨忌や木の葉とはごは踏で来る 同」「ばせを忌や下手の嘘さへ手向草 同」（十一日）高步来訪。本名日逞上人と称す。今般京都より下って逗留。「酒に無明と名付け玉ひしは、法華経の金言。宗祖の油のやうな酒五升もらひたまひしは有がたき化導也。予はまたもらひし酒に無価の珠も忘れんとせしか。「禅堂の月に居眠る行脚哉 高歩」「和田峠にて、是ほどは笠にも置ん今朝の霜 同」（十二日）「夜のうちに橋も反りしか今朝の霜 水」「定会連衆入来。（十五日）」「よしあしを捨て御法へ帰り花 良好」「庭作りなる良好禅門に一句を望まれて、「谷ごもり庭にもうつす鷺の山 水」（十八日）「雪の日や遠き耳にも鐘の声 元齋」「人丸は何に譬へん山の雪 水」（廿一日）一樹軒会（廿二日）八代白桂江都より帰着を訪ひて使を遣す。（廿三日）筑路奉納句合額相談に入来す。室伏仙志三熊野奉納勸進に「里神楽絵馬賑はしき鯨船 水」「鴻巣柳也文通、「松風も力添けり初しぐれ 柳也」「水鳥や濡ずに遊ぶ水の上 同」「宇治に居て茶はきらひ也網代守 同」「湖へ水はもどして秋暮れぬ 同」（廿四日）うかひ山終会。今日来歳旦、春興の句衆議し侍る。（廿六日）「物ぐさの神や付けん冬ごもり 水」「木がらしや目もあてられぬ吉野山 水」「もののふのうしろ見らるゝこたつ哉 水」「茶の花や路次のやうなる畑の道 水」「初に聞く心地こそすれ鉢叩 水」「終夜手の鍬をのす火槌哉 水」「人の為綿つむ人の寒さかな 水」「嬉しさに寒うなりけり衣配 水」「音に聞く鳴門も鳴らず八重霞 水」「藪入の衣裳懸けたり背戸の松 水」（廿七日）文通。「後の月更て熟柿の落つる音 古尺」「世を逃げて住まい醍醐や竹の春 水」（十二月二日）「膝を抱く庵の炉端や年忘 童歳」「音をもてなす余所の餅搗 水」「両吟歌仙興行。（三日）柳鶴法師同伴にて上小河原へ行、黄昏帰る。（四日）昨日おさよ・千助・来訪、今夕まで逗留す。僕忠蔵今夕引越。（五日）鬼孫八代より帰る途中にて、嘉庚不幸聞及び候よし。依って三人同伴にて喪を吊ふ。「向岡舎に盃盤狼籍たりし次の日、同じ

こころの友だち、ふたりみたり打寄って即興。「降積し翌こそよけれ雪に月 氷」「埋火をして直す文台 氷 歌仙興じ、夜更けて帰庵。(十日)今朝小寒に入。柳霞法師同伴にて岩泉に詣で石碑に箔を入れる。(十二日)今年結び会。定連入来。七十二候興行。(十三日)善光寺参詣、府下迄行。(十五日)仲亮桑門武江より帰り侍りしとて文通にて春興を「梅がかの岸から亡る水清し 仲亮」「太刀持ちの柄に手を指す柳哉 同」「極りに和ぐ庵や花の友 同」。(十八日)嘉庚ぬしは紡績のいとま風月にめでて言の葉もてあそはるゝ事いとかしこかりしが、はからずもなき人にかずまへられて、山なし岡に行水の絶ぬ噂とはなりぬ。「佛は立ち去らで寒し鏡建 氷」(今月四日に卒す)。(十九日)信州より先達、阿老文通。「ゆりすへて月静也春の海 阿老」「花ならば一重桜や春の雪 同」「帆柱も残り少なき浦の秋 同」。「左の好士はこたつに紫ふとんをかけ、右は火桶にはなだのしとねもつけつ。句作には四十八手をとり組て、おのがじし目ざましからしめんと成べし。ことの葉は中々くれず冬ごもり 氷」右、雁嶺下春竹催しける角力句合の奥にかいやり侍る。(廿五日)「山寺やうらと表に帰り花 石牙」今日府下へ。

二、俳諧活動の考察

(一) 平橋庵での俳諧指導

(1) 宗匠としての指導の最も重大なのは、月次会であるから、月次会の実態を検討することから始めよう。

一月十二日 初会 連衆三十二人。各、題霞。

例年のように百韻を興行し、後座に霞を題として各発句を吟じている。敲氷の句は「晴て見んよりは絵島の薄霞 氷」

二月十二日 定会連中入来。

三月十二日、月並会定連入来。

四月十二日、定連の好士入来。七ツ時百韻満尾。

五月十二日、定連の人々入来。

六月十二日、定会百韻興行。(天明八戊申歳林鍾十二日、平橋庵興行という八丁の草稿があり、評は平橋庵代として秀外評となっている。)

七月二日、月次百韻興行連衆入来。

八月十二日、定連入来。百韻興行。

九月十二日、雨降終日舟わたし留り、定会連衆入来十三人。

十月十二日、祖翁忌。時雨には旅人と呼ばれ、初雪には庵に罷有る風雅の句在り。あふげばいよいよ高し。「魂招く日や寒菊にみそさゝる 氷」例年の如く五十員興行。連衆十五人。

十一月十二日、「夜の中に橋も反りしか今朝の霜 氷」定会連衆入来。

十二月十二日、今年結会。連衆入来。七十二候興行。

月次会は天明七年と同様に十二回催された。十月の月次会は芭蕉忌として催されたが、七月は十二日を繰り上げて二日に営まれ、十一月は歳旦や春興の句の衆議は行われなかった。十月は五十韻興行、十二月の結び会は七十二候であったが、その他は百韻が興行されたと推定される。

月次会以外に平橋庵で催された俳諧興行を列挙すると次のようである。

ア 二月八日、如雪叟が三歳を経て来訪、鬼孫を交えて三吟歌仙興行。

イ 二月十四日、秋江来訪し歌仙一折興行。

ウ 三月廿九日、五原来訪し歌仙興行。

エ 四月四日、溜川入来、鬼孫を加えて三吟歌仙興行、翌五日その末を継ぐ。

オ 五月二日、山鶏小祥忌遠夜に歌仙一折を連ね、各々発句。「あやめに懐旧の心を あやめ草伸びつつ過ぐる月

日哉 氷」

カ 五月十八日、鴉路逗留し、両吟歌仙を興行。(全五丁の草稿残る)

キ 五月晦日、守黒忌五十韻興行。今日雨甚だしく渡船止まり、連衆往反なり難く、両三人にて興行する。(五丁

の草稿が残存する) 昨日法筵後座に「美濃あふみ境の知れぬ青田哉 氷」

ク 七月廿七日、古丸・童歳同伴にて来訪。三吟歌仙興行。花餅のかいしきにみる花野哉 氷(かいしきは食物をもち器や神撰にしく木の葉である)。

ケ 八月廿一日、露敬・秋江・夏明三婦人来訪。「香にめでて虫も覗くやきくの庵 夏明」「月の出しほの遅き山陰

氷」歌仙興行。

コ 九月十日、今夜船渡さず。百朶上人投宿。歌仙興行する。「いざよひの月や欠けたと思はれず 百朶」「木賊に

水を替る生筒 氷」

サ 十月朔日、「しぐるゝや鷹は濡てもわろびれず 氷」「山風寒き野路の明ぼの 童歳」昨夕三吟歌仙興行。

シ 十月晦日、一日百題発句興行。連衆十一人。暮六つ過ぎ満尾。一日百首は詩や和歌で一日に百首を詠ずること

であるが、一日百題発句は詩や和歌に準じて、一日に百題の発句を作ることであり、百題集と名づけられた句集には四季合わせて百句が集められているところから、百題の発句は四季に分け合計百の発句ということになる。

ス 十二月二日、童歳と両吟歌仙。「膝を抱く庵の炉端や年忘 童歳」「音をもてなす余所の餅搗 氷」

以上十三回の興行は、平橋庵で催された。歌仙が八、歌仙一折が三、五十韻が一、一日百韻発句が一、興行されたのである。

〔二〕平橋庵を出ての俳諧指導

散水が平橋庵を出て、多くは求められて、俳諧指導に赴いた日を「坐右掌記冊」などに記されている中から摘記すると次のようになる。

- 1 一月廿四日、うかひ山初会。題臘月、「宵ながら夜明に似たりおぼる月 氷」
- 2 同廿五日、求風亭天神講へ招かる。「鶯の背中ぬくめる旭哉 氷」
- 3 同廿八日、夕陽左城・少川同伴にて竹原田亭に赴く。
- 4 三月七日、山梨へ行きて夕暮帰庵。古岡氏のいちくらの構えを祝す。
- 5 同廿四日、うかひ山会へ行く。
- 6 同廿五日、笛川舎新築の賀筵に招かれて百韻興行。
- 7 同廿九日、月次句合の用にて山梨に行く。
- 8 四月十七日、四日市場連中へ問訊する。
- 9 四月廿三日、魚藻に運斤録をかす。
- 10 四月廿四日 うかひ山月次会へ会する。阿蘭陀人の山水の文字に発句を乞われて「山も水もさだかにみへね横がすみ 氷」

11 同廿六日、光福寺道遥院へ詣で鎮目迄赴く。

12 五月七日、魚泉亭（前号平坡）新宅を祝して「濡色の壁匂ひけりあやめ草 氷」

13 五月廿四日、うかひ山会。当座題ざくろの花、「つくつくと画師の花見るざくろ哉 氷」

14 同廿五日、絶えていた古府の如雪庵月次会今日より催す。「今日の客に早乙女入れて六歌仙 氷」

15 六月八日、梅花齋に会す。題清水、「物凄く成て立退く清水哉 氷」

16 六月廿日、鎮目一樹軒会。当座夏の茶「夏菊や花垣も匂ふあやめ草 氷」

17 同廿四日、うかひ山会「蓮咲くや朝々習ふさうの笛 氷」

18 七月五日、甲府官舎渡辺氏風恵坊又金ぬしを訪ふ。如雪庵の会に行く。夕暮帰庵。「引なれし弓の強みや今朝の

秋 氷

19 九月四日、今日山梨岡より鎮目まで行く。夜に入って帰る。

20 九月八日道義居士五十日法筵に招かる。一宿帰庵。この頃「仁山道義居士寂語諱」成るか。

21 九月廿日、高橋常德寺に於て百韻興行。おのおの露に題して「降りもせず湧もせずして草の露 氷」当座暮秋

「行秋や海は青くて物すみき 氷」

22 九月廿一日、うかひ山中嶺南窓にて、秋釈教「経塚に妙なる声ぞ蟋蟀 氷」

23 九月廿三日、一樹軒会。五十韻興行。おのおの種瓢、「五条にも売るほどはなし種瓢 氷」

24 十月三日、府下へ行く。

25 十月十日、かも（現、春日居町）より落合（現、山梨市）へ。

26 十一月八日、梅花齋会。おのおの霜、「浅晝の群青さめつ霜の朝 氷」

27 十一月廿日、一樹軒会。

28 十一月廿四日、今日来歳旦・春興の句を衆議する。

29 十二月三日、柳霞法師同伴にて上小河原に行く。黄昏帰。

30 十二月六日、向岡舎に盃盤狼籍たりし次の日、おなじころの友どちふたりみたり打ち寄て即興「降積し翌こそよ
けれ雪に月 水」「埋火をして直す文台」歌仙興行。夜更て帰庵。

31 同十三日善光寺詣、府下迄行く。

32 同廿五日、今日府下へ行。

33 同廿七日、府下へ行、夕陽に帰庵。

以上平橋庵を出て俳諧指導したと認められる月日を掲げたが、主要なものだけでも三十三回に及んでいる。最も重視していた月次会・守黒忌や芭蕉忌などを含めて平橋庵で八年度中に催された俳諧指導は計二十五回であり、平橋庵を出て俳諧指導したのは三十三回である。合計すると一年の間に五十八日は俳諧興行の指導をしていることとなる。

㊦ 敵水の社寺奉納句

天明七年に続いて、敵水の社寺奉納句が多い。「坐右掌記冊」などに記されているものを掲しておく。

三月十二日、桃園（現、榭形町）の桃李勸進で七面宮奉納。「朝夕のぬさに捧げん玉椿 水」

同十九日、立川不動尊奉納軸に「誰も誰も七日籠るや花の瀧」、秋葉山奉納軸に夏季として「籠り人の火に怪我もなき
蚊遣哉 水」

同廿七日、百々村（現、白根町）清水亀三郎奉納句合懐紙携へ来訪。

四月廿二日、閑水奉納句合懐紙持参。

四月廿九日、和田（現、甲府市）連中観音大士奉納、需に題して発句勸進す。「身をこらせ霜ふむ道を朝もうで 水」
七月廿四日、かも（現、春日居町）定経神靈三十三回忌句勸進。「藤よりも細き鮫を手向哉 水」

八月三日、川中島（現、石和町）山王社奉納軸。「神領へ猿の出で引く鳴子哉 水」

九月廿九日、西山一之瀬太神宮奉納軸。「伊勢笠を着連れて神の田刈哉 水」

十一月廿三日、奉納句合額相談に筑路入来。

同月同日、三熊野奉納発句を室伏仙志勸進に「里神楽絵馬賑はしき鯨船 水」

四 敲水と濶路の死

「坐右掌記冊」の天明八年一月二日、春興の句を十一句掲げた後に「右社中早春小篇へ加入」と記されている。恐らく歳旦帳を出版する予定であったと思われるが、歳旦帳を発見することはできない。同書の同年二月朔日に見える敲水の「初午や和田の子孫の幾屋敷」についても、「右稚羊・佐楽の小篇に載す。」とある。また、三月廿三日の条に「五雲法師「杜若小篇」の議談す」、五月二日の条にも「山鶏小祥忌速夜に、百朶上人・風条法師を招きて、元斎・鬼明両子は追善集の催主にて侍れば、今夕招きて稿を談す。」などが見え、六月十七日の条に閑能斎来訪、板行用事」などとある記事がしばしば見える。俳諧の書物の出版と山鶏の追善集「茶の噂」の準備をすゝめたようである。

しかし彼の健康は多忙な俳諧活動のためにしばしば害され、「坐右掌記冊」にはその片鱗が記されている。「一月九日野子足腫物にて昨日より痛み甚だしく歩行なりがたし。」「同十一日、春貝入来、予足の腫物療治す。」「同廿三日、春貝入来足療治。」「同廿四日、昌久来訪療治。いまだ足痛不癒。」「同廿六日、足痛再発。未だ足の痛み不癒。」「同年二月朔日、昌久入来療治。」「同二月十四日、今夕風邪にて宵より臥す。」といった健康状態であった。

多忙な俳諧活動に明け暮れる中で、生涯を通して指導支援を惜しまなかった養老園濶路の死は、敲水を深く悲しませる事柄であった。しばらく敲水と濶路の交際をたどってみよう

「亥の年日記」（平蕪庵稿）明和四年二月四日、丸丸齋（養老園の前号）のあるじ訪はる。雪降て信宿す。歌仙興

行。降る中に蝶も見えたり春の雪 潤／花は先へ伸る薬烟 鳥我／ 同廿二日、八代丸丸齋に遊ぶ。稲山を遥に望みて 稲山や麓ははやく種おろし 我／

「袖中日記」（平橋庵稿）安永六年十月廿四日、八代養老園（注、丸丸齋を改号）の門の垣ふるきを改て冬の日ざし長閑なりければ、「茶木畑花のうねうね鶏の声 平橋」「小春と人の告る山里 潤路」同廿五日歌仙興行。

「坐右稿」（平橋庵）安永八年二月十四日、養老園に淹留して当座。「寒食や不二も烟らぬ朝朝 氷」同三月四日、八代養老園に逗留して雨中のつれづれ、潤・氷の発句。同三月十九日、潤路と表六章。「行春や宇治は焙炉に立つ 烟 潤」「宿かる門の暗き藤棚 氷」同四月廿三日、八代養老園に遊びて燈下に本朝歴史を読む。折ふし時鳥を聞く、「見ぬ人を友とする夜や時鳥 氷」

以下「坐右稿」には二人の親密な関係が頻繁に記されているが、省略する。天明七年に、潤路は桃溪と改め養老園を仙湖齋と改めた。天明七年の「座右稿」（平橋庵）三月廿日の条には「杜栄・敲氷・鬼孫・溪十・桃溪の五吟歌仙が興行されたが、当座吟として、「夏書する窓は出来たり暮の春 仙湖」「さらし搗唄から明てころもがへ 同」同五月晦日に平橋庵で守黒忌捻香発句の会にも、氷室の題で、「横平に衛士をあしろふ冬籠 仙湖」と吟じ、同十一月十二日の月次会にも「不二を見る窓はふさがず冬籠 仙湖」と吟じ、俳諧を楽しんでいた。

天明八年には桃溪は老弱のため引き籠ることが多く、五月晦日の守黒忌五十韻興行にも平橋庵に出向くことができなかつた。病床にある桃溪を敲氷が見舞ったのは七月四日で、病む身には秋冷の到来を待望しながら桃溪は、「蚊屋を出て床はなれせん宿の月」と吟じ、敲氷は「命を延る秋の初風」と応じて励ました。「坐右稿」には（天明八年）七月十二日、仙湖齋のあるじの病を訪ひに夕暮より行て、初更過に帰庵。同七月十六日、午時より八代へ行く。夜に入りて帰庵。同月廿日、仙湖齋没故を告来る。同廿二日、昨日八代へ行く。夕陽帰庵、と記されている。また、「坐

右稿」には、仙湖すなわち仁山道義居士長逝を悼んで次のようにも記している。

道義居士のはいかに遊ばれはいくばく年か。ただ人和をむねとして名の聞ゆるまでに親しむ人少からず。心の物数奇は常にさびにめでおごりをにくむ物から、蘭に臘さらし覆はず、桃に粗朶垣を足れりとす。さるから前号も桃溪・桃長者などほどもかされし。月雪の折にふれて口ずさびにみづからえたるをば、頓にやつがれに聞ゆ。やつがれも得たるをば相告て、かたみに打うなづきしが、ことしふづきすえ紫の雲井はるかに隔て、雁のおとづれだに及ばぬわざとなりたれば、袖の露払ひあへず、手向はべることくさ。「此秋は誰と共にか月を見ん 氷」

「坐右日記」の引用で、不十分ながら潤路と敲氷の深い交際を知ることができるが、平橋庵の発足から潤路の没するまで、敲氷が尊敬すべき人物・俳人として推重している点からして、平橋庵の充実発展には不可欠の指導者であり支援者であったと言えよう。「仁山道義居士（養老園潤路居士）寂語諱」一折も残されている。

朽ぬ物は其文月の筆の跡

平橋庵
敲氷

したへど遠き西に有明

蘭子

城普請雁も驚く貝吹て

兀貫

飯槌ほかほか湯気の立ける

光里

上張も同じ物着て兄弟

養胤

寒さ紛らす確のうた

敬父

酒造る伊丹の町は夜も寝で

潮平

夫婦もろとも秋葉信心

君馬

柱込し香に奇麗なる白浴衣

求鳳

稽古のまりは緑細の垣 一哉

上京にしばらく坐敷かり切て 平坡

老ず死すの薬弘むる 百童

補説をすれば、右の寂語諱に見える潮平は、敲水の次男で、前号は長瓜。天明の初年に濶路の養子婿となっていた。潮平と改号したのは寛政元年七月二日の平橋庵百韻興行からである。兄山鶏養父濶路没後は敲水の支援に活動するのであった。

(五) 敲水と闌更・蝶夢・重厚

闌更は明和七年（一七七〇）から安永三年（一七七四）の間に越後及び甲信に遊吟したのであるが、「半化坊句集」（天明七年正月刊）に見える甲斐での諸句はその折の吟であろうか。「甲斐のしら根、百里来し甲斐有夏のしら根哉 闌更」「さし出の磯、黄昏や水にさし出のうす紅葉 同」「酒折の宮もほどあらざれば、火ともしの神もめづらん月今宵 同」「甲斐より信州へ越る、数十丈見上げれば岩の垂氷哉 同」上の句からすれば、吟行も夏から冬に及んでいったのか、あるいは幾度か甲斐を訪れたのであろう。闌更と敲水の関係を示すの記載は敲水の天明八年の「坐右稿」に初めて見える。

六月十一日、闌更・黒沢坊来訪。

木曾山や花に吹込む雪おろし 闌更

忍び音や耳とき人に郭公

夏の月滝の水上を澄み登る

ひるがほや日に咲むかふ花ただし

六月や雲紅にまだら富士

乾憲雄氏編の「高桑闌更の年譜」によれば、天明八年正月京の大火、この年再び江戸に遊吟か」と記されているが、
敲水の坐右稿によって甲斐にも来遊したことが判明する。天明六年京都の双林寺の地内に芭蕉堂を建て、堂前で花供
養を営み、蕉風を顕揚しようとする闌更の情熱は、敲水らにも一入蕉風俳諧を意識づけたと思われる。やがて寛政七
年（一七九五）等々力村万福寺境内に三車上人によって芭蕉句碑が建てられ、「駒塚集」が出版されるに至るのであ
る。

蝶夢（一七三二—一七〇五）と敲水との関係はいつごろからであるか判然としない。天明三年の「座右稿」に次の
句が見える。三月七日、書信。「寒月や綿着て戻る白拍子 京 蝶夢」「ふくろうや雪止み月も入りし後 同」。また、

天明五年八月二十日の書信にも、「雪解や小御門出入る人の袖 京 蝶夢」「夕づく夜隣の庵に海苔や焼 同」「燕の行
かひしげき汐干哉 粟津 沂風」「花守の宿も桜の木の間哉 同」沂風（一七五一—一八〇〇）は蝶夢の弟子である。

天明七年十月九日の文通として、「嵯峨あらし山の桜に大井川にて、丹波から来る水ならし花の塵 蝶夢」「御宮の花
花千本みな幕ならぬ陰もなし 同」とあり、天明八年の「坐右掌記冊」には「三月十八日、洛の幻阿上人（蝶夢）東
洛に錫を飛して予が戸叩るる日は、外に出てたいめせず。しかじかの事染筆置てはやりかにも、差出の磯づたひにい
そがれしが、ほいなくて落葉庵たづねてせうそ贈る。其はしに口すさび侍る。「庵に花あらば一夜はあるじせん
水」「野こえ山こえ蝶のせはしき 幻阿」とある。天明八年正月晦日の大火で、その十九が烏有に帰した京都の焼跡
を後にして、蝶夢は二月廿六日に弟子木姿を伴い裏富士を見る旅に出発した。蝶夢に「宇良富士紀行」があり、木姿
に「富士美行脚」がある。「富士美行脚」は所々に略画などもあって、参考になるので、今「富士美行脚」を引用す
ると、蝶夢らは敲水の出向いていた田中を訪ねたが、敲水に会うことができず、弟子の重厚（一七三八—一八〇四）

に選合した。川中島へ赴こうと志する重厚を無理に東都に帰り伴う結果となった。田中から小原に出て落葉庵石牙を訪い、蝶夢と重厚の二人の大徳は石牙と無二の旧友であったから昼夜をわかつ語り尽くした。一方重厚は去來の落柿舎を山本村の弘源寺跡に再興し、明和八年には去來六十八回忌追善集「去來忌」を、安永三年には「落柿舎日記」を刊行するとともに、九州・東北など各地に行脚した。甲斐を訪れた最初の記録は、石牙編の「宇良不二」（天明六年刊）の序が初見であろう。序によると天明四年重厚が石牙の依頼に従って「宇良不二」を編集したことがわかる。その中には重厚・石牙や可都里などの歌仙や発句、諸国からの文通による発句などが多い。「差出磯眺望」と題して次の句も見える。

うら不二や皐月はれ行夜の山 重厚

名月やつらつら交る白樺 石牙

名月のをしくも照らず深山哉 可都里

まつかぜのかきけすごとし子規 敲氷

敲氷と重厚との交友は石牙を介して行われたものであろう。その後も関更・蝶夢・重厚ら蕉風を目指して活動する俳人らと敲氷は文通を重ねつゝ、我が俳諧の向上を願ったのである。